

ふくしまYMCA

私たちのふくしま



編集 東日本地区YMCA総主事会議

「ふくしま YMCA」刊行にあたって

全国 YMCA 総主事会議

2015 年 12 月 2 日東日本地区 YMCA 総主事会議が宮城県で開催されました。そこでは、主管であった仙台 YMCA の村井伸夫総主事の提案のもと「フクシマの現状」というテーマで「東北ヘルプ」の川上直哉牧師を講師にお招きし研修会を開催しました。翌日、マイクロバスで福島に移動し、参加者は車窓から帰還困難地域である浪江町、双葉町、大熊町の様子を目の当たりにしました。

翌 2016 年 7 月 11 日に北海道で開催された同会議において、震災後 5 年が経過した福島の状況について同じ東日本にある YMCA の総主事会議としてどう課題化していくかについて協議が行われました。その結果、多くの支援団体、ボランティアグループが撤退して行く中、今後も福島を支援する活動を継続していくことが再確認されました。また、ぐんま YMCA の村上祐介総主事より過去 5 年間、全国の YMCA が福島に関して行った活動の報告書を東日本地区 YMCA 総主事会議としてまとめてはどうかとの提案が出されて一同はこれを承認しました。

再度、学びの場を設けようということで、2016 年 11 月の会議は福島県いわき市で開催され、以下の内容が決議されました。

(1) 東日本地区 YMCA 総主事会議が行う支援活動、プロジェクトを総称し、また将来「福島の地に YMCA を」という願いを込めてプロジェクト名を「ふくしま YMCA」とする。

(2) 「ふくしま YMCA」として冊子を発行し、原発に対する学び、意見を育てる。復興支援活動を支えた当事者の声をまとめる。5 年が経過した現実の課題に目を向ける。

(3) 2017 年 4 月 15 日（土）埼玉 YMCA が主管で開催される東日本地区 YMCA 理事・常議員・総主事研修会までに冊子「ふくしま YMCA」をまとめる。研修会では冊子を利用した研修の実施、基調講演を組み立てる。

その後、2017年2月15日、北九州で開催された全国YMCA総主事会議において「復興支援プロジェクト『ふくしまYMCA』」の名称を使用することが承認され、同時にこのプロジェクトは東日本地区YMCA総主事会議だけのプロジェクトではなく、全国YMCA総主事会議のプロジェクトとし、同会議としてこの冊子を発行することとなりました。

この冊子は、三部構成になっています。Ⅰ部は、特別寄稿として福島支援の活動に携わっておられる方々、あるいは、福島に現在お住まいになっている方々からの寄稿を掲載しています。Ⅱ部は、東日本地区YMCAが行った復興支援活動に関わった方々、またそれぞれのYMCAと関係の深い諸団体の方々からの寄稿です。Ⅲ部は、2011年から5年間、全国のYMCAが福島復興支援として行った主な活動を掲載しております。

時間の関係上、寄稿、資料は東日本地区のYMCAの活動が主となっていることをお許してください。

この冊子をベースにそれぞれのYMCAにおいて福島に対する学びがより深められていくことを願いつつ本冊子の刊行の辞と致します。

第1章 特別寄稿

『天災と人災を経験したフクシマの今～
東日本大震災と福島第一原子力発電所事故災害～』

社会福祉法人堀川愛生園 施設長 伊藤信彦

ふくしまYMCAという挑戦

日本基督教団仙台北三番丁教会 川上直哉

三菱商事 YMCA フレンドシップキャンプ

三菱商事株式会社 総務部 復興支援室 室長 中川剛之

福島とともに

映画監督 古居みずえ

『天災と人災を経験したフクシマの今～ 東日本大震災と福島第一原子力発電所事故災害～』

社会福祉法人堀川愛生園 施設長 伊藤信彦

(1) はじめに



平成23年3月11日に起きた日本史上でも未曾有の災害である東日本大震災と、津波によって引き起こされたというよりも、当時「安全」と言われていた福島第一原子力発電所の事故災害により、福島県民は二重の苦しみを今も負っています。原発から半径25キロ圏内、いわゆる放射能災害危険区域内は今もあの日、あの時のまま時間が止まっています。そこに生活していた住民はむこう40年は帰ることはできないであろうと言われています。聖書で言えば『イスラエルのバビロン捕囚』さながらの出来事が起こったのです。一昨年あたりから、帰還ができるようになった地域は増えていますが、帰れたところであの時にしていた生活が再開できるかといえ、極めて厳しい現実を目の当たりにしなければなりません。また、津波の被害にあった地域と原発事故災害地域が被っており、二重の災害によって町ごと移転している地域や、災害発生直後の避難先、仮設住宅、災害復興住宅とこの5年の間に住む場所を転々としなければならない人々もいます。慣れ親しんだ故郷のコミュニティは崩壊し、最愛の家族を失い、瓦礫の中から立ち上がることも許されないような二重、三重の苦しみを負っている人たちがいるのです。また、この原発事故による放射能汚染により戦後、原子爆弾が落とされた広島に次いで

「フクシマ」という地名が全世界に一躍有名になりました。国内においては放射能汚染の地として震災による被災以上に風評被害がいまだに県民を苦しめています。

これらのことはマスコミ等を通じて折々に報じられていますが、震災から6年が経とうとしている今、徐々に風化され人々の意識の中から消えていく不安を感じざるを得ません。東日本大震災と津波被害という天災を経験し、さら

に、原発事故災害による深刻な環境汚染問題の中で日々生活している福島の実を少しでも多くの方々に知っていただきたいと思います。

(2) 3月11日午後2時46分という時、それから…

この時期は東北地方では公立中学校の卒業式のピークです。金曜日ということもあり福島県下ではこの日の午前中、一斉に公立中学校の卒業式が行われました。わたしが生活している県南地域の棚倉町もこの日の午前中は地元の棚倉中学校の卒業式が行われました。当時は小学生、高校生共に学校に行っていました。園にいたのは中学生と自宅学習期間に入っていた高校3年生でした。地震の後、小学生が集団下校で帰ってきました。途中までは職員が迎えに出ていました。高校生はそれぞれが無事に園に戻ることができました。ライフラインは一斉に止まりましたが、電気は夕方には復旧し、水道も夜には出ていました。県南地方でも棚倉町は地盤が固かったのが幸いして大きな被害が出ることはありませんでした。その日の夜は、園の子どもたちは3階建ての管理棟の1階講堂に集まって一つ所で職員たちと寝ました。時折起こる余震とその前に必ず起こる山鳴りの「ゴーッ」という音に小学生たちは怯えていたからです。この日から、わたしたちは先ず災害直後の食糧確保や大規模な余震によるライフラインの寸断に備えての水の確保、そして、ガソリンを含む燃料の確保が困難になっていました。日中でも余震は起こりましたから、子どもが不安にならないようにできる限り一緒にいるように心がけました。ちょうどテレビで福島原子力発電所が津波によって大きな被害を受けたとの報道も始まっていました。しかし、子どもたちには映像を通しての津波被害のほうが強烈な印象として残ったようです。この時には、この原発事故による深刻な環境汚染がすでに始まっていたことなど想像もできませんでした。福島も岩手、宮城ほどではないにせよ地震以上に津波による被害が大きかったと言えます。その被害の中に福島原発がありました。

(3) 刻々と深刻化する原発事故による放射能汚染の中で

震災以降、津波被害を受けた地域を中心に災害救助が行われる中、福島では放射能汚染災害という第2の被災が深刻化していきました。避難所から遠く

の地へとさらに移送される中で高齢者を筆頭に衰弱死が相次ぎました。一時的な避難と考えていた県民はそれから長い時間、自分の家に戻ることもできませんでした。今もなお帰還困難地域は残っています。福島県民は全国的に放射能被曝に晒されたとして報道され、そのニュースは世界にも拡散していきました。しかし、ここで生活する者にとって目に見えず、匂いや肌身で感じることもできない低線量被曝という出来事は時間の経過とともに深刻な事態であることに気付かされていきます。まず県内各地域に子どもを中心に生活している空間での被ばく量を測定する「ガラスバッジ」というペンダントのような装置を首から下げて生活しました。一定期間が過ぎると回収され、それぞれの被ばく量の測定が行われました。また、4月以降、学校が再開されますが、屋外での活動は極力しないこと、屋外に出る際には帽子、長袖を着用することが推奨されました。県内の学校は夏に入ると屋外プールは使用できず、屋内プールを利用しての水泳学習や、屋外での体育の授業や運動会は長袖、長ズボンを着用して行われました。時を同じくして夏ごろからは「県民健康調査」と称して3月11日以降どこで何をしていたのか詳細に報告する調査用紙が配られました。そのデータは福島医科大学直属の県民健康調査室に蓄積されています。また高濃度汚染地域から子どもたちの体内被曝量計測として「ホールボディ検査」が実施され、そのほか血液検査、甲状腺検査などが県内全域に実施されていきました。夏以降、新聞やテレビ報道で小学生が集団で鼻血が止まらないなどの出来事を報じる中、県外では福島から避難していった子どもがイジメにあうことも報じられました。最近でも新潟で福島から避難した子どもがイジメにあうことが報じられましたが、園の子どもたちも学校での子どもたちの会話などから県外に出ればイジメにあう不安を感じていました。放射能被曝による健康被害はある程度の時間が経たなければ出ないようですが、これから先、フクシマの子どもたちが健康で健やかに成長してくれるのを祈るばかりです。

(4) おわりに

今、福島では震災当時0歳から3歳までの子どもたちが就学するまで成長しています。しかし、多くの子どもは大地震のショックと経験するしないにかかわらず映像等を通して強烈に焼き付いた大津波のできごとを負っています。そ

の影響は情緒面に顕著にでている子どもも少なくありません。発達障がいを負っている子どもが県内では増えています。それにより学級崩壊や家庭での虐待などの事例も増えています。福島はまだあの3. 11から立直りきれていないというよりも、その傷がまだ生々しく残っている状況と言えます。多くの県民は、被爆者として生きなければなりません。それは、いつ自分の体に異変が起こるのかわからないという不安であり、若い人々にとっては自分の子孫にまでどのような影響が及ぶのかわからないという不安です。このような拭いきれない不安の中で今を生きる人々がいることを忘れてはいけなと思っています。

ふくしまYMCAという挑戦

日本基督教団仙台北三番丁教会 川上直哉

「被災地の人ほど、被災者に冷たい。」はっとさせられる言葉を聞きました。それは、東北の被災地の現在を嘆く言葉でした。しかしその後、少し聞き取りをしてみましたら、熊本の被災地でも、同じことが語られていることがわかりました。「灯台下暗し」ということ、なのでしょうか。

先日、曹洞宗のお寺で和尚さんたちと被災地支援のための会議を持ちました時、お寺の玄関に「脚下照顧」と書かれていました。「灯台下暗し」と分かっているなら、足元に広がるその暗がりには明かりをつけてよく見てみることで、と、諭された思いがしました。仙台の被災地に住む私たちは、「被災地に冷たい」姿勢をとっていないか。立ち止まって足元を見つめ直さなければならぬ。そんなことを思いました。

今、「ふくしまYMCA」が立ち上がろうとしています。これは、「脚下照顧」を目指す、ひとつの挑戦なのだと思います。その挑戦は、意味ある挑戦だと思います。でもその挑戦は、手探りの連続となるでしょう。ですから私は、ここで、足元にある暗なりに少しの光を入れて見るような報告をしてみたいと思います。

2017年1月18日、仙台市内の教会で、社会学者、ソーシャルワーカー、被災地ボランティア、臨床宗教師（公共空間で支援活動をする宗教者）が集まってワークショップを行いました。この日は、福島県の浜通り（太平洋沿岸部）の和尚様がお越しになり、現状報告をしてくださいました。

この和尚様のお寺は原発事故現場から「約30キロ」の地点にありました。檀家の皆様のお宅は「強制避難区域」の境界線にまたがるように広がり、また同時に、「津波被災地」の境界線をまたがるように点在しておられます。震災前から地域への貢献を目指してきたお寺でした。200年以上の伝統があるお寺でした。そして、2011年3月がやってきました。

原発近くの寺の住職として、和尚様は原子力＝核エネルギーの表と裏をよく学んでおられました。原発事故を受けて、行政首長の指示に従い、家族を会津に避難させます。しかし和尚様はその地に残りました。実に多くの方々が「避難できない」事情を抱えていたからでした。

人々は避難できない、でも、放射能の影響を考慮して、物流は完全に止まってしまう。餓死する危険を感じた和尚様は、家族が避難した会津との間をディーゼル車でピストン輸送し、物資を調達して地域の人々を見舞いました。そうしているうちに、彼のお寺に電話がかかってくるようになったそうです。「なぜ、逃げないのか、逃げるように指導しないのか。あなたは、人の命を何だと思っているのか。」それは支援者からの声でした。だから、厳しい電話の声を、和尚様はじっと忍耐して聞く。そういう日々が続いたそうです。

2017年のワークショップで、和尚様は私たちに言いました。「福島県の太平洋沿岸は、200年ほど前、大飢饉に見舞われました。土地は荒れ果て人々は行倒れる、そうした中へ、北陸から、大勢の人々が“密入国”してきてくれた。当時の幕藩体制では、大規模な人の移動は非合法なものでした。しかしそれをおして、一向宗の末裔の人々が、飢餓に苦しむ人々を救うためにやってきた。

“お上”の支援は一切受けられない中で、北陸から遠路を踏破してきた人は、荒廃した大地を耕し、そこで子どもを育てた。そうして今の福島県浜通りがある。だから、そこで生まれ育った人々の中には、“放射能くらい”で土地を離れるわけにはいけないと思う人もいる。その人々の思いを否定することは、誰にもできない。自分は、そうした人々の思いも大切にしたい。」

和尚様が向き合っているのは、分断と孤立です。和尚様自身も、家族を避難させた。避難させることの権利は確保しなければならない。しかし、土地に生まれ土地を愛して生きてきた人々の思いもある。避難しない権利をも、私たちは大切にしなければならない。ここで、分断が生じます。そして、分断の「あっち」と「こっち」の間には無関心の空間が広がり、そこに敵意の壁がゆっくり育ちます。そして、人々は孤立してゆく。

分断はあらゆるところに広がっています。福島県と宮城県の県境に、巨大な無関心の空隙があります。その間を行ったり来たりするたびに、私の心は乱れます。福島県内でも、浜通り（太平洋沿岸）と中通り（福島市・郡山市など内陸盆地の都市部）とでは、全く違う空気が支配します。浜通りでも、「津波被災者」とそうでない被災者、そして「強制避難地域」の地権者とそうでない地域の地権者の間に、分断が生じています。

今、福島県以外の人々の中から「ふくしまYMCA」が生まれました。このことの意味を思います。それは、無数に広がる分断を乗り越えようとする挑戦なのだと思うのです。福島県内には、上述の和尚様のように分断に耐える人々に寄り添う働きがいくつもあります。キリスト教会もネットワークを組んで、踏みとどまっている。分断を乗り越えようと現場にとどまっている人々にとって、「ふくしまYMCA」の誕生は、どんなに大きな励ましとなることでしょう。

復興とは、いったい何でしょうか。民主党政権下で施行された「福島復興再生特別措置法」の第二条に「復興とは・・・地域社会のきずなの維持及び再生」と定義されています。そして、長い条文の中で「多様な住民の意見を尊重する」ことが手段とされています。ある研究者は、この「復興理解」にこそ、原発事故に由来する社会的な問題の根があると指摘していました。つまり、「地域」が目的となり、「一人ひとりの意見」はその手段となる。「地域再生」のために「様々な立場の人々」が動員される。それが復興とされているから、分断が広がる。目的と手段がひっくり返っている。だから、地域が復興し

て人々は孤立するということが起こりうる。——この指摘は、現場に立つと、ぞっとするほど正鵠を射ているように思われます。

ここで、日本YMCAの基本原則が思い出されます。そこにこうありました。「私たちは、すべての人びとが生涯をとおして全人的に成長することを願ひ、すべての命をかけがえのないものとして守り育てます。」

避難する人、避難すべき人、避難しない人、避難すべきではないと思う人。その一人ひとり「すべての命」が、かけがえのないものである。それを守り育てなければならない。子どもだけではなく、老人も、大人も、それぞれを守り育てる。そのために力を出し合い、連帯し、支えあう。それは数値目標を定めて到達度を測定することが難しいことです。でも、だからこそ、みんなで力を合わせて息長く続けることができる。そこに孤立は解消される。そしていつかやがてきっと、分断も消え去る時が来る。

1月のワークショップで、和尚様は、「分断」の痛みを語りました。沈鬱な思いで聞き入る私たちが、おずおずと、「これからどうなりますか」と尋ねました時、和尚様はすっきりした顔で、「大丈夫です」とお答えになりました。「あと5年もすれば、みんな、今の痛みを水に流すでしょう。一緒に生きていくんだから。嫌なことを蒸し返す人もいるでしょう。でも、大丈夫。何とかあります。」

時間を味方につくこと。そうすれば、未来は明るいこと。そのことを、和尚様ははっきりと信じておられました。時間を味方につくこと。そのことと、過去の歴史を大切にすることとは、きっと、結びついている。そのことにも、はっと気づかされました。

私は牧師ですから、聖書の故事を思い出します。世界戦争に巻き込まれた小国が、ついに耐え切れず、亡国の憂き目にあった、というお話です。今から2500年ほど前の実話。その人々は、あろうことか、自分たちを滅ぼした敵国の首都に強制移住させられた。敗残者のみじめさを毎日深く味わいながら、その人々は物語を編み始めます。自分たちの生き残りをかけた物語。その物語の冒頭は、こうなっています。「初めに神は、天地を創った」。

その「天地創造物語」は、荒廃した大地を描写して始まります。茫漠として何もない混沌の世界。神はそこで無為にふわふわと浮いて見えるのみ。しかしその神が声を出す。「光あれ」。すると光が生まれる。光は何のために生まれたか。それは時を生み出すものでした。混沌に満ちた闇の世界に、時間が流れ始める。時間が闇と混沌の中に新しい命を生み出し始める。次第に、世界は命に包まれて行く。命に満ちたとき、世界は「はなはだ良いもの」となる・・・。

この物語が語るメッセージは、明快です。苦しみの中で「時間こそ良いもの・頼りがいのあるものだ」ということです。時間を味方につけること。それは、和尚様の希望を支える土台と共通していることでしょう。「ふくしまYMCA」の挑戦は、新しい時間を生み出す一歩です。それは、混沌の闇に投げ込まれた光だと思います。この光に、神様の祝福があふれますよう、お祈りしたいと思います。

三菱商事 YMCA フレンドシップキャンプ

三菱商事株式会社 総務部 復興支援室 室長 中川剛之



三菱商事では、2011年3月11日に発生した東日本大震災の翌月、「東日本大震災復興支援基金」を創設し、さまざまな復興支援活動を展開してきました。その活動の一環として、チャリティランへの協賛などでつながりのあった日本YMCA同盟と協働し、被災した子どもとその家族が心のやすらぎを取り戻すためのボランティアプログラム「三菱商事YMCAフレンドシップキャンプ」を実施しました。三菱商事の役員による義捐金に加え、会社が基金から同額をマッチングした総額約1億3,000万円を寄附し、2,000人を超える子どもたちや家族を招待しました。

フレンドシップキャンプでは、学校が長期の休みとなる夏や冬を中心に、季節にあったスポーツや、木工や粘土などを使ったクラフト製作、花火、アウトドア料理、キャンプファイアーなどを行い、雄大な自然の中で、被災した子どもとその家族の方々にのんびりと過ごして頂きました。参加した子どもたちからは、「外でたくさん遊べてうれしかった」「いっしょに遊んでくれたリーダーみたいになりたいと思った」「かけがえのない思い出になった」「ずっとキャンプのこと、わすれません」といった声が寄せられ、また家族の方々からも、「震災以前の生活を思い出すことができました」「子どもが虫や植物、土に触れることも、雨に当たることも気にする必要がなく、のびのび遊ばせられる毎日がうれしかったです」「子どもに負けないくらいリフレッシュした妻の顔を見て、参加できて本当に良かったと思いました」「子どもたちのことを考えると不安もたくさんありますが、頑張っていこうと思います」「3歳の我が子が、手を挙げて、大きな声で発表したことにびっくり。キャンプのおかげで、子どもの成長する力を信じようと思いました」といった内容の数多くのお礼の手紙が届きました。私自身も、東山荘でのキャンプに参加させて頂きましたが、富士山の大自然の中で、大人も子どもも歓声をあげて、時間も忘れて遊びに熱中していた光景が忘れられません。

日本YMCA 同盟や各地のYMCA が主体となって企画・運営する一方で、三菱商事グループの社員もキャンプスタッフとしてボランティア参加。今後の復興への一助となることを願い、被災された方々がキャンプを通じて心身共にリフレッシュできるよう、盛り上げに一役買いました。参加した社員からは、「『私の想像以上に大変な思いをされているんだな』と改めて実感するとともに、この災害の重大さを再認識したキャンプになりました」「今回のキャンプを機に、小さなことでも日常で何かできることがあれば参加したい、という思いが一層強くなりました」といった声が寄せられ、被災された方々の不安や痛みに寄り添うことで、逆に希望と元気を頂き、社会貢献について改めて考える良い機会となりました。

福島とともに

映画監督 古居みずえ



2017年3月末、国は帰還困難区域を除いた福島県のすべての避難区域の避難指示を解除する。

私が6年間、通い続けた飯舘村も避難解除が行われる。しかし帰村が出来るからといって、放射能の恐れもなく、昔のままの飯舘村に帰れるということではない。それどころか、今でも放射線量は高く、キノコや山菜の山の恵みを受けることも出来ず、自給自足に近かった自然

の中での生活はできない。

私は昨年、この飯舘村を舞台にした映画「飯舘村の母ちゃんたち 土とともに」を制作した。その映画の後半、主人公のひとり、菅野榮子さんはフレコンバック(放射能廃棄物が入った黒い袋)に向かって「おまえたちもかわいそうだな」とつぶやく。そのフレコンバックの中に入っているものは、榮子さんたちが何十年も耕し、肥やし続けてきた汗と涙の結晶の土が入っていた。

榮子さんによると、農地の除染は上から5cmの土を剥ぎ取って、かわりにそこに山から取った砂地を入れる。砂地は放射能をはじくからというのが理由のようだが、砂利や石ころが混じっている土は、農地の代用にはならないだけでなく、雨や雪が降れば流れ出して家にまで入ってくるといふ。

2013年以降、本格的な除染が始まったが、除染したといっても世界基準値にまで下がったということではない。確かに除染後には数値は半分にながっている。しかしながら飯舘村はもともと高い放射線の数値で、それが半分になっただけで今でも1マイクロシーベルトを上回るところはたくさんある。

そしてフレコンバックが各区域にそれぞれ山積みになっている。同じ伊達東仮設住宅に住む元酪農家、長谷川健一さんの自宅の居間からはなだらかな山や田畑の美しい眺めが見えていた。しかし除染後、黒いフレコンバックが1段、2段と徐々に田畑に積まれ、今や山の大半は隠れてしまっている。

そんな状態の村になぜ今、急いで帰らねばならないのか、疑問がわく。さらに2018年3月末には賠償金も打ち切られる。村外で帰村できない人たちは、自分の家があって帰村できる人よりも厳しい状況におかれる。

避難者の一人は話す。「原発事故で一番こたえるのは、家族がバラバラになり、地域の人たちのつながりも切れてしまったことだ」という。

避難生活6年は長かったが、帰村する人も、帰村しない人もこれから厳しい正念場を迎えようとしている。

第2章 地域における取り組み

北海道 YMCA

一人一人が社会の力持ちになること NPO 法人みみをすますプロジェクト 代表 みかみめぐる

盛岡 YMCA

福島を訪れて感じたこと 岩手大学人文社会学部 3年 大藤百華

復興に向けた再認識へと 岩手県立大学社会福祉学部4年 川口奈恵

とちぎ YMCA

ワイズメンズクラブのふくしま支援 宇都宮ワイズメンズクラブ 大久保知宏

縁による支援とYMCA への期待 認定NPO 法人とちぎボランティアネットワーク) 矢野正広

茨城 YMCA

福島との関わりに関する活動報告 日本基督教団筑波学園教会 (役員) 吉田博夫

茨城 YMCA のスマイルキャンプ 茨城 YMCA 本部館長 和田賢一

つくば市における原発被害者避難所支援 茨城 YMCA 大澤篤人

千葉 YMCA

フレンドシップキャンプの取り組み 千葉 YMCA/千葉市少年自然の家 プログラムディレクター 鶴岡義久

ぐんま YMCA

外で遊びたい！！ ぐんま YMCA リーダーOB 山田雄介

埼玉 YMCA

子どもと一緒に未来を考える大切さ 埼玉 YMCA 総主事 小谷 全人

在日本韓国 YMCA

外国人被災者の現在と支援 福島移住女性支援ネットワーク (ETWAN) 代表

在日本韓国 YMCA 理事 佐藤言行

東京 YMCA

東京 YMCA の取り組み 元東京YMCAスタッフ 本田真也

横浜 YMCA

コンセントの向こうに福島が見えたか？ 福島を、私たちの問題に捉えられるか

横浜YMCA総主事

田口努

福島の子どもたちの未来に向けて

郷ヶ丘幼稚園園長

前山成子

福島の人々と寄り添う歩みを

平幼稚園 園長

丹野真人

震災6年目の現実

映画監督

飯田基晴

避難者とともに

守りたい子ども未来プロジェクト実行委員会副代表

神奈川県ユニセフ協会事務局長

谷杉佐奈美

山梨YMCA

「そこにYMCAがあることの意味」

山梨YMCA 総主事

露木淳司

一人一人が社会の力持ちになること

NPO 法人みみをすますプロジェクト

代表 みかみめぐる



■市民が創った緊急支援活動 「むすびば」について

2011年3月11日に起きたM9.0の東日本大地震は、地震動と大津波によって東北・関東地方に未曾有の被害を与えました。また地震に伴って発生した東京電力福島第一原発の事故で放射能汚染による被害は日本の広範囲に及び、その影響は今も続いています。

2011年3月16日、札幌では有志による最初の呼びかけに80名を超える市民が集まり、被災者の支援に向けた市民組織「東日本大震災市民支援ネットワーク・札幌（通称むすびば）」が誕生しました。翌月からは北海道YMCAの協力も得ながら街頭募金活動や避難者への生活物資提供を開始しました。

北海道には3,500人余りの避難登録者がおりましたが、早い段階から避難してきたお母さん達もスタッフとして関わり、「むすびば」の支援活動に当事者の声を反映させました。放射能汚染下の子ども達を救うことに最も力を入れた「むすびば」は、移住の支援や呼びかけにとどまらず、様々な事情で福島県などから動けない方達に放射能によるリスク軽減のための保養事業を他団体と連携しながら実施しました。また、時間の経過とともに人々の記憶から遠ざかる状況に対して支援の必要性を訴え続ける活動、北海道・札幌に避難している子ども達への学習支援、コミュニケーションづくり、全国各地で保養などの受け入れ活動を行う団体のネットワークづくり（311受入全国協議会の発足）など、その活動は多岐にわたりました。

■みみをすますプロジェクトの誕生とその活動

みちのく会（北海道の避難者自助組織）や行政、中間支援団体、医療機関、教育関係者との連携を深めながら3年間緊急支援活動を続けた「むすびば」は

2014年の春に発展的に解散しましたが、その活動を継承しつつ、今最も必要と思われる支援を行うために「みみをすますプロジェクト」（略してみみすま）が誕生しました。

「みみすま」は避難している小・中学生への学習支援活動を継続すると共に積極的に福島県などに通い、原発事故後、活動をはじめた現地のお母さん達のグループをネットワークし、互いの悩みや問題の共有と励まし合いの場を設け、放射能防護や保養の必要性を専門家から学ぶサロンづくりなどを実施。それは実に小さな営みの積み重ねでしたが、地域の中でだんだん孤立感を強めていた人が他の町の同じ考えの人達と出会うきっかけとなり、全国で応援している人達との繋がりも増え、福島県の実情を県外の人達に知ってもらうための語り部活動を行うグループも地域を越えて生まれました。

こうしたサロン活動を通して見えてきたことは沢山ありますが、例えば児童養護施設などの子ども達が保養の機会に恵まれていないという実態も明らかになり、「みみすま」は日本YMCA同盟と協働していわき市の児童養護施設の保養を実現させました。

また311受入全国協議会が年に数回福島県内などで実施する保養や移住の相談会の運営にもサロン活動で協働している人達が主体的に関わっています。

「ほよ～ん相談会」というこの催しは、夏休みや冬休みの保養受け入れを行う全国の団体が現地に足を運び、ブースを出して相談者と直接向き合う活動で、毎回30団体余りが参加します。受け入れ活動を継続するのはなかなか困難なことですが、それぞれに工夫を凝らして多様な保養活動が全国で展開され、それは日本独自の保養文化を形成しています。

来場者も毎回100人以上を越え、保養、移住、健康など相談内容も様々ですが、放射能被害によって人々がどのように悩みながら生活しているのかが顕在化する大切な場が市民の力によって支え続けられています。

■これからの活動について

原発事故後7年目を迎える今、避難区域の解除や住宅支援打ち切りに伴い広域に避難していた人達が福島県に戻って来ることも増えていきます。その一方

で子ども達の健康被害は悪化していると言わざるを得ませんし、そもそも除染自体が里山を多く抱える福島県などではなかなか厳しいのが実情です。

いつまでも放射能汚染による混沌とした状況は拭えませんが、これから新しい命が生まれ子育ては続いていきます。若い人達の家庭も増えていく中で必要なことは、一人一人が疑問や不安を声に出せること、一人一人が自分達の社会をより良くしていくことに参画できること、一人一人が将来に希望を見いだせることです。そのためには閉塞しがちな旧来の制度に縛られずに、人と人々が自分の力で繋がっていくことが大切です。

そういう可能性を信じて、一人一人が社会の力持ちになることを目指す。放射能被害に遭っている子ども達への支援活動の中に人としての普遍的な考えや共助の思想を育むこと。これが一粒の希望の種だと私は信じています。

福島を訪れて感じたこと

岩手大学人文社会学部 3年

住友商事 東日本再生ユースチャレンジ・プログラム インターン生 大藤 百華



私たちは、インターンシップ活動の一環として昨年12月21日に福島県の東白川郡棚倉町にある堀川愛生園、南相馬市にある原町教会を訪問しました。

そこで私たちは、震災後の福島県の状況、放射能被害の現実、児童養護施設の問題など震災を経て辿ってきた福島県のさまざまな問題についてのお話をお聞き

しました。わたしがお話を聞く中で感じたのは、原発事故が福島県に残した震災の爪跡は想像以上に強いものであるということです。わたしも岩手県の沿岸地域である宮古市で生まれ育ったため、震災は自分の生活の中に溶け込んだ存在でした。宮古市は津波によって大きな被害を受けたため、一部の街は失わ

れ、地域を支えていた産業である漁業関係の方々も大きな被害を受けました。津波によって大きな被害を受けた地域には瓦礫があふれて街はヘドロだらけになりましたが、現在では瓦礫の撤去作業は完了し、復興住宅も多く建てられ始めています。また、被災して街のほとんどが失われて更地になってしまった地域にも新たな家が建てられているところもあります。津波によって家や街が失われてしまったとしても、再びそこで生活する決断をするということは、それだけその地域を大切に思っているということだと思います。私は今まで岩手県の被災状況しか見ていなかったため、本当に少しずつではありますが、復興は進んでいると感じていました。しかし今回福島県を訪れて感じたのは、震災後の時が止まっているという感覚でした。驚いたのはいまだに原発付近の地域では基準値を超える放射能が観測され続けていることです。放射能が観測され続けているため、その地域にある住宅や建物は手が付けられない状態となっており、震災後から劣化したそのままの形で残されています。住人は自分の住んでいた地域から出ていくという選択肢しか与えられず、いくら自分の住んでいた地域に戻りたいと思っても不可能な状態が続いています。その空間だけが異様な空気をもっていて、人が一人も歩いていない状態でした。その地域が基準値以下の放射能観測値となり、再び人々が生活できる状況になるまでに何年の月日がかかるのか、そこで暮らしていた方々にとっては故郷を失ったことと同然だと思います。

また、堀川愛生園、原町教会どちらにも放射能計測器が置かれており、常に現在の放射能を測定できる環境が整えられていました。しかし、原町教会に隣接されているこども園では、未だに子どもたちは外で遊ぶことは避けられており外には放射能をあまり浴びないよう工夫された遊具が設置されていました。盛岡 YMCA でも被災地である宮古市の子どもたちとアドベンチャーとして外の自然にたくさん触れて遊ぶボランティア活動を行っていますが、福島県の被災地域では外で元気に遊んで自然に触れることさえ危険を伴うことなのだと感じ、心が痛みました。原発事故が残していった残酷な現実だと感じました。現実を見れば見るほど、震災による原発事故が福島県に残した傷はものすごく深いことを実感させられ、私たちに辛い現実を押し付けてきます。私たちが復興に向けてできることは、福島県に起きた震災や原発事故による被害の重さを知り、

事実を正しく受け止めて再び同じことが起きないように後世に伝えていくことだと思います。

震災からあと少しで6年目になろうとしています、あの日の記憶や震災後の苦しみは私の生活の中に深く生き続けています。それは私だけではなく、震災を経験したすべての方々にとって同じことだと思います。「東日本大震災」によって私たちは多くのものを失い、当たり前として存在していたものは一瞬にして当たり前ではなくなっていました。多くの人があの日から「日常」というものを失ったと思います。だからこそ、私たちは「当たり前」に存在しているものの大切さをこれでもかという程に痛感させられてきました。私は現在地元である宮古市を離れ盛岡市で生活しています。盛岡は直接の被災地域ではないため、地元にくらよりも「震災」に触れる機会が少なく、盛岡に移り住んで3年が経とうとしています。しかし再び「当たり前」というものの大切さを忘れてかけてしまっていたように思います。しかし今回福島県に行って震災のむごさというのを改めて突き付けられ、今は失いかけていた6年前の鮮明な記憶が自分の中で蘇ってきました。「忘れてはいけないんだ、あの苦しみを二度と繰り返さないために」という思いが自分の中で沸いてきました。私たちは震災を教訓にしていかなければなりません。1000年に一度といわれる震災を経験した私たちがしなければならないのは後世にこの記憶を伝えていくことだと思います。福島県を訪問したことでこの自分の思いを再確認できたことは自分の中で震災を改めて考え直す上での一歩になったと思います。6年目が過ぎようとしている今、日本全体としても「東日本大震災」に対しての意識が薄れていく中で、今一度震災が私たちに気づかせてくれたものを見つめ直し、それを忘れずに伝えていくということがこれからの私たちの課題であると感じました。

復興に向けた再認識へと

岩手県立大学社会福祉学部4年

東日本再生ユースチャレンジ・プログラム インターン生 川口奈恵



2016年12月21日、福島県を訪問した。被災地大船渡出身で復興に携わりたいと始めたインターン活動の一環であった。盛岡YMCAの濱塚総主事の運転で福島に向かい、はじめに白川郡棚倉町の児童養護施設である堀川愛生園を訪ねた。大らかで優しい口調の園長、伊藤信彦さんは、福島の現在そして施設で暮らす子どもについて、私たちにもわかりやすいように噛み砕いて話をしてくれた。話から震災や原発が子どもたちに大きく影響を与えているということがわかった。原発が原因の避難により、運営できる施設が減ったことで、地元を強制的に離れなくてはなくなった子どもがいることや、子どもたちにPTSDなども心理的な影響も見受けられるなど、様々な問題を抱えて生活する子どもたちがいるという。けれども、一緒に暮らす子どもたちの様子や育って欲しい姿を思い浮かべ、熱心に話す伊藤さんから、子どもへ対する真摯な思いが伝わってきた。現場で支援している人の思いが子どもへも伝わり、復興を後押ししてくれればと感じた。最後に、伊藤さんから原発や復興に対する意見は色んな人の意見を聞くべきだとのアドバイスを頂いた。私たちは流されやすい。風評被害やいじめも流されやすさが原因なのかもしれない。一つの意見を鵜呑みにするのではなく自分で見聞きしたことを元に、物事に対して自分の考えを導き出していく必要があると感じた。

次に訪れたのは、南相馬市の原町教会である。そこでは教会の牧師と隣接する子ども園の園長を兼任している中野通彦さん、そして盛岡YMCAと交流がある市内在住の岡田虎治さんも加わり、主に南相馬の現状や復興に対する各自の思いを共有した。南相馬では放射線の除染が進み、町に少しずつ人が戻ってきているが、以前に比べ町を盛り上げて引っ張って行ってくれるような若者や労働人口が少ないという。また補助金や避難の問題で支援の格差が現れ、避難した

まま帰ってこない人々が大勢いるのも事実だと知った。その他、支援を受けるだけではなく、エンパワメントの視点を持ち、現在起こっている問題に対して向き合っていくべきだという意見もでてきて、とても印象に残った。現場での現状や各々の思いを聞く程に、自分が何も知らないということに気づいたが、知る事ができたからこそ、やるべきことがあると感じた。

福島復興を考えるのと同時に地元大船渡も必然と考えてしまう。私はふと、母のすすり泣く声を思い出した。当時陸前高田で働いていた母を襲ったのは職場で自分だけが助かってしまった罪悪感と沿岸で暮らす両親の安否だった。子どもに悟られまいと隣の部屋で押し殺している声に高校生の私は気付いていたが、逃げ出すかのようにボランティアへと自転車を走らせた。幸い親族に被害はなかったが、今でもふと思い出すくらい私にもそして母にも心に引っ掛かりが残っている。誰しも当時の思いは薄れるし、今生きるのに精一杯な時期を過ごしてきたと思う。しかし当時の私が何もできなかったのは、今このインターンの被災地復興支援活動にもつながったし、被災地にきっと未来があると信じたい。今回の福島訪問を通して、被災したのは岩手だけではなく、原発で今も苦しんでいる福島の人々がいること、それについて知ろうとしてこなかったことを再認識できた機会であった。沢山のしがらみと思いを抱えているが、今一度復興という同じ目標に向けて様々な立場の声に耳を傾け、今に合わせたまちづくりをしていく必要があると感じた。そして復興に携わる一人として、当時を思い出して辛い思いをしている人に寄り添い、自分たちで何ができるか考え続けていきたいと思う。

ワイズメンズクラブのふくしま支援

宇都宮ワイズメンズクラブ 大久保知宏



ワイズメンズクラブは、東日本エリアに62のクラブがあり、その中の11のクラブが北東部として岩手県から群馬県の5県に位置して、地域に密着した奉仕活動を行っています。特に先の東日本大震災以降は、被災地として世界中のクラブの支援を受けて復興支援活動をしています。

ユース・リーダーズ・アクトは、支援活動の中で、宮城県内の被災地の少年サッカーチームを支援する形で誕生しました。本年度北東部長のもりおかクラブの長岡さんの部長方針で、福島への復興支援強化が提案されました。その方針を受けて、今回の4回目となるユース・リーダーズ・アクトは形を変え、福島県太平洋沿岸地域の少年ドッジボールチームの支援に加え、福島県への復興支援の在り方を若者たちが考える機会とするものとなりました。

2016年度年実施のユース・リーダーズ・アクトは二部構成をとり、第1日目第一部では南相馬市と仙台市のドッジボールチームを招き、北関東一円から集まる子どもたちと「とちぎYMCA杯エンジョイドッジボール大会」の真剣な試合を通じて交流を図ります。北東部内の盛岡、とちぎの各YMCAで子どもたちの活動を支援しているユース・ボランティア・リーダーには、子どもたちのサポーターとして活躍していただこうと考えています。

第2日目第二部では「みらくるプロジェクト」として前日から活動しているユース・ボランティア・リーダーに加え、栃木県内の高校生以上の若者、さらにそれを支援するワイズメンズクラブのメンバーも加えた80名を想定したフォーラムを開催します。午前中は「地域コミュニティと防災」を研究テーマとしている宇都宮大学の中村教授と、震災以降支援活動が続けている宇都宮大学の学生グループ宇大UP!の小原代表にお話しいただきます。また、福島県南相

馬市小高区で復興支援活動を行っている高校生グループ「LL0

(LiveLineOdaka)」の皆さんにも活動状況のお話をいただきます。午後にはそのスピーチを受けて、「福島の子どもたちと一緒に笑顔！」を実現する為に、「今、私たちにできること」をテーマに設け、ゲストスピーカーのお話やグループディスカッションを通じて得たものを発信し、共感、行動して行く事で福島の子どもたちを笑顔にする事、3.11の出来事を風化させない事を目的としたものとします。

縁による支援とYMCAへの期待

矢野正広（認定NPO法人とちぎボランティアネットワーク）

東日本大震災が発生して6年。それから10日間は、ガソリンもなく、道路通行許可書もなく、車もなく…あるのは職員3人と会員600人とボランティアで災害救援をやってきた経験だけだ。

国・自治体など役所の支援方法は「お金」と「事業」である。いわば“持てる者”の支援だ。一方で、私たちボランティアの支援方法は「関係性」である。“縁による支援”だ。ゼロからお金も事業も人もなく、全く見ず知らずのひとと、丸腰で「縁づくり」をし、お互いが変容しつつ、何かを創り上げる。そういう作業がボランティア・NGO/NPOの災害救援・復興支援である。

国・自治体など“持てる者”の支援は、お金があるうちは事業をするが、お金がなくなると止めてしまう。縁により支援は「あなたのその行動が必要だよ」という励ましや頑張り、承認…の言葉の内在化・内面化により発生する行動であり、お金がなくなっても持続する行為を生む。

一方で関係性はめんどくさいものであり地縁・血縁はその最たるものである。地域コミュニティ＝ムラ社会は、現実には「助けあい機能」を失っているが、様々なしがらみだけは生き残っていて、それらは田舎の人の行動を縛る呪いとなっている。形骸化したムラ社会は“ゾンビ共同体化”しているのだ。

都市ではSNS普及により、若者の行動がバーチャルのゾンビ共同体に支配されている。生活保護者不正受給バッシング、在日外国人ヘイトスピーチ、ネットいじめ、

ライン自殺…。これらは自身が「いじめ・排斥に賛同する者」となっているうちは感じないが、いったん自分が当事者となった時には、ウワサが怖くて「SOSを出せない人」となってしまう。

ボランティアは「めんどくさい関係」を正常化する清涼剤である。そしてゾンビ化した暗いウワサネットワークを吹きとばす力がある。青年活動が本業であるYMCAには、今だ復旧にも達せず、ボランティアとの縁づくりにも着手できていない<福島>の人たちに対して、上記のような現状認識と支援理論を踏まえたうえで、福島と福島の若者の元気を作る活動を創発してほしいと思う。

福島との関わりに関する活動報告

日本基督教団筑波学園教会（役員） 吉田博夫

2011年3月11日東日本大震災直後、福島先生をはじめ郡山教会の皆様も非常な戸惑いと困難の中にあったことと拝察いたします。このような中で福島先生はつくばに着任されました。関係者の皆様にはただただ感謝するのみです。この着任をきっかけに筑波学園教会と福島とのつながりができたことは言うまでもありません。大きな恵みです。

さて、私たち学園教会は翌2012年4月の総会で「この地においてなくてはならぬ教会の形成を目指す」という計画を立てました。具体的に何ができるか福島先生と茨城YMCA宮田総主事とで話し合いを重ねてくださいました。

その中から、是非郡山の子供たちをつくば周辺に招いて放射線からの避難プログラムと一緒にやりたいという計画が示されました。幸いなことに三菱商事からの資金援助をいただけるとのことでした。

このような背景の下スマイルキャンプが企画されました。第一回は2012年8月1日～3日まで常総市にある「あすなろの里」で開催されました。茨城YMCAスタッフとリーダーの働き、教会からは福島先生ならびに教会員有志の奉仕がありました。当初は申し込み人数が少なくて心配もありましたが、最終的には小学生1年生から6年生の合計29名もの参加がありました。郡山を出発してつく

ばに到着した1日目の子供たちの昼食は私たちの教会の女性の会が備えてくださいました。期間中事故もなく病人も出ずに楽しいひと時を過ごした、とのことでした。

三菱商事よりの支援は2012年で終了とのことでしたが、引き続き翌年2013年8月4日～6日第二回（子ども夢基金の支援）、また2014年8月12日～20日第三回（日本基督教団東日本復興支援基金）と、ほぼ第一回と同じプログラムに沿ってキャンプが開催されました。第二回、第三回と参加者数は少なくなりましたが、まことに恵みに満ちたキャンプでした。これらの子供達も現在では中高生になっていることでしょう。このような機会をとおして若い魂に福音の種がまかれたならば大きな喜びです。

これからも、地域になくってはならぬ教会を目指し、私たちの教会と茨城YMCAと共同で行うプログラムを考えていきたいと思います。

茨城YMCAのスマイルキャンプ

茨城YMCA 本部館長 和田 賢一

東日本大震災の翌年2012年夏より東日本大震災復興支援として、スマイルキャンプを実施してきました。2012年は三菱商事助成金、2013年子ども夢基金、2014年～2015年は日本基督教団・東日本大震災救援対策本部援助金等々の助成金を頂き、これまで福島県の子ども達約90名、茨城県の子ども達約150名を招いて、キャンプを開催することができましたことは感謝なことでした。2016年は日本基督教団・東日本大震災救援対策本部援助金より、38名参加のキャンプを予定しておりました。これが台風の接近のため中止となり、悔いの残る形となりました。多くの方々より、これからも実施してほしいとのお声を頂き、YMCAを必要とされていること、今後も実施していくべきことを改めて考えさせられました。

スマイルキャンプの当初の目的として、被災された福島県で日々生活をしている子ども達が、放射線の被ばく被害を気にせず、野外・屋外で思いきり体を動かす活動を通して、

参加者と送り出す保護者の心身のケアをすることがありました。

最初は福島の子ども達だけのキャンプを実施しましたが、2013 年からは、新たな仲間との出会いと、自然の中での体験活動を通して、キャンプ生活を楽しみ、少人数グループによる非日常活動の中で新たな気付きや心身の成長につながる場とすることとしました。

その後、福島県外に避難させている方と茨城県の子ども達も含めてのキャンプを行い、それぞれ異なる地域の子ども達同士の良い出会いの場とする 것도 目的の一つに加えて実施してきました。

また、キャンプ・チャプレンは、震災当時は郡山教会で伝道をしていました福島純雄牧師（2011 年 4 月より筑波学園教会赴任が決まっていた）に担っていただきました。筑波学園教会からは、第 1 回からボランティアリーダーと共に関係者多数がキャンプに関わっていただきました。このキャンプへのボランティアは合わせて、延べ 70 名の方々にご協力いただきました。

スマイルキャンプを実施している中で、印象に残る福島県の女の子がいます。第 1 回目から欠かさずに参加してくれたその子は、毎年 YMCA のキャンプを楽しみにしており、多くのリーダーがその子の成長を見守ってきました。保護者から、将来は YMCA のリーダーになりたいと常日頃語っていると聞いていました。スマイルキャンプを通じて、かけがえのない経験と素敵な出会いがあったのだと、嬉しく思います。今年は 6 年生となり最後のキャンプになる予定でしたが、台風のため中止となり、残念な思いをさせていただきましたが、今後も繋がってみたい大切なメンバーの 1 人です。

まだまだ、復興半ばの、苦難の中にある被災地の方々を思い、これまで参加してくれた方々やこれから出会う方々にとって、YMCA の活動が生きる 1 つの糧となることを願いつつ、福島の子ども達、保護者の方々と繋がっていける活動を続けられればと思います。

つくば市における原発被害者避難所支援

茨城 YMCA 大澤 篤人

3月14日、茨城県つくば市には、福島県いわき市方面からの原発事故による自主避難民が、続々と南下してきた。14日午前、宮田総主事は普段から親しくしていた、つくば市社会福祉協議会の久松事務局長と、市役所ロビーで偶然に行き会った。その場で、久松氏から緊急の依頼を受けた。

それは、増え続ける自主避難民の人たちへの初動の支援体制を組む任務であった。市社協も、態勢が整っていない中、想定を超える事態となっていたためである。避難所の一つである洞峰公園内の洞峰体育館での避難民応援、支援者受け入れ登録、支援物資受け入れ等のためのスタッフ・リーダーの派遣等の支援である。これを正午より直ちに開始した。

数日間は、刻々と変化を伴って、押し寄せる避難民や突如寄せられる支援物資などの受け入れや、多すぎる災害支援のボランティア希望の人たちへの対応を大きな混乱なく進めることに集中した。そのような中、茨城 YMCA が支援物資・ボランティアなどの受付業務をすべて請け負うことで、つくば市や社会福祉協議会への大きなサポートができたと自負している。

18日には社会福祉協議会からの要望もあり、茨城 YMCA スタッフ和田賢一主事が現場統括として対応本部に加わった。前日同様受付業務全般の他、支援物資運搬・整理や食事準備などを行った。この時点での洞峰体育館は、約340名、72世帯ほどの避難民を受け入れていた。

19日よりつくば市が前面で対応し、避難所も落ち着きを取り戻してきた。この時、洞峰体育館内アリーナの中は、居住空間でもあり、子どもの遊びスペースでもあった。子どもたちは、騒ぐことも走り回ることもできない環境であったため、大人も子どもも次第にストレスが高まっていた。

茨城 YMCA として、こうした環境にある子どものケアを市側に提案。毎日2時間程度の時間を作り、長期間に亘って関わっていくことを決意した。

20日から23日まで、子どものケアを引き続き行った。子どもたちや保護者との関係作り、さらには子ども同士、家族同士を繋いでいくことを意識して関わっていった。21日の時点で約290名の避難民を受け入れていた。

関り続けていく中で、YMCAを信頼する雰囲気は避難民の中に徐々に醸成され、24日より外遊びのプログラムを提供することとなった。

24日以降、午後の1時間を使って洞峰公園芝生広場にて、ドッチボール、大縄、サッカー、キャッチボール、鬼ごっこ、ドッチビーなどを行った。

基本的には自由遊びで、3歳から大人までが参加した。初日の24日は子ども約40名、大人約20名が集まり、体を動かした。子どもたちは発散場所が無く、夜眠れないといった状況があったが、外で思い切り遊ぶことができたことで夜も眠れるようになり、大人の方たちも体を動かすことで気持ちが楽になったという、感謝の言葉を戴いた。

その後、東京YMCAからのスタッフやボランティारीーダーも合流し、4月6日までの間に10回の外遊び、延べ1,000名以上の方が参加した。

3月29日にはつくば市からの要請を受け、もう一つの避難所であるつくば国際会議場前の竹園公園でも同じプログラムを行った。27日時点で約190名の避難民を受け入れていた。

茨城YMCA・東京YMCAのボランティアも多く関わっていただき、約1か月で60名を超えるリーダーが避難所支援に携わって下さった。

当時、私・大澤は茨城YMCAに就職をするタイミングで、3月17日に引っ越し、19日に初出勤という予定であった。この震災のため初出勤の日が数日遅れたため、リーダーOBとして最後のプログラムが、この避難所支援であった。ここは私が、YMCAの作り出す不思議なエネルギーを肌で実感した時間であったように思う。その事例の一つを紹介したい。

この支援プログラムの中で、いわき市から避難してきた大学生「あっちゃん」と出会った。あっちゃんは、外遊びのプログラムでも、YMCAのリーダーと共に、リーダーの役割を担って子どもたちと率先して遊んでくれた。自分の故郷を離れ、先が見えない避難所生活の中にあつて、自分の居場所・活躍の場を見つけたようにも見えた。茨城に避難していた短い時間ではあったが、YMCAと関り、そこでのボランティारीーダーとも友人になり、深い友情を築いた出来事

であった。避難所内のプログラムが終わった後も、リーダーたちとのプライベートな交流もずっと続き、数年後、茨城 YMCA のリーダーがあっちゃんの自宅に遊びに行ったという話を聞いた。



YMCA には、助けを求めている人たちを様々な形で救い、助ける力があること、人を引き付ける魅力があることを強く感じた。私たちは YMCA であるからには、こうしたエネルギーを生み出すパワーを持っているからには、地域や社会において担う責任があることを忘れずに、これからも困難の中にあっても光が見えない人たちに寄り添う活動を続けていかなければならないことを深く心に留めておきたい。

フレンドシップキャンプの取り組み

千葉 YMCA/千葉市少年自然の家
プログラムディレクター 鶴岡義久

千葉YMCAでは2012年から毎夏に千葉市少年自然の家でフレンドシップキャンプを実施しています。このキャンプは、福島県伊達市の子どもたちを千葉に招待し、外遊びを思う存分してもらおうと始まりました。また、千葉市の子どもたちが福島の子どもたちのサポートを行い、プログラムを通して交流を行うことも目的の一つとしています。子どもを放射能からまもる会in千葉やジェフユナイテッド市原・千葉、リソル生命の森など、たくさんの方々に支えられて実施しています。

<参加者の声>

- ・はじめは千葉の子と仲良くできるか心配だったけど、千葉の子がやさしくしてくれて、とてもうれしかったです。私は少しはずかしがりやであんまり話せなかったけど、グループの人たちが話しやすくって、いっぱい話すことができました。それにこのキャンプに参加した人たちに「だいじょうぶ」や「ありがとう」

と言うと、必ず返事が来て、「うん、だいじょうぶ」や「どういたしまして」などを必ず言ってくれて、とてもうれしかったです。（福島児童）



・いろいろなプログラムがあったけど、一番楽しかったのは、自由時間です。部屋で気軽にみんなと話したり、ベッドに寝たり、別の部屋に遊びに行ったり、リラックスできて楽しかったです。3泊4日がとても短く感じられて、プログラムが無くて、ずっといたいと思いました。また来たいけど、6年生なので楽しかったことを思い出して、元気になると思いました。（福島児童）

- ・「みんなでトランプをやろう！」とか「いっしょに遊ぼう！」「ベッドをくっつけて寝よう」って言って千葉の友だちから積極的に仲良くなろうとしてくれてとてもうれしかったです。（福島児童）
- ・最初は福島の子はどんな子かなと思ってドキドキしていた。こっちから話しかけなきゃと思っていたけど、福島の子から話してくれ、びっくりした。グループのみんなでもた会いたいです。（千葉市児童）

<保護者の声>

- ・震災後、仮設校舎でやっと今年(2015年)の3月に新校舎ができたけど、校庭はまだ完成していないので、外で思いっきり走ったり、運動したりが、ぜんぜんできなかったの、千葉でのびのびと体を動かすことができ本当に良かったです。日焼けして帰ってきた息子の姿を見て、あんなに不安がっていたのに、どんなに楽しめたかが、にじみでていました。（福島保護者）
- ・震災後、はじめてキャンプに参加しました。出かけた先で地震があることを怖がり、今まではキャンプに参加したくないと言っていたのですが、今回はお友だちに誘われたこともあり、行くことにしました。行くまでは不安ばかりだったようですが、帰ってきた時の笑顔を見たら、行かせて良かったと思いました。（福島保護者）
- ・幼稚園から小学校低学年時、室内で制限された活動しかできなかった息子が、素晴らしい環境でのびのび運動することができ、本当に嬉しかったと言ってい

ました。それだけでも親は嬉しく思います。(福島児童保護者)

- ・福島の子どもたちから自由に暮らせる幸せを感じられたようです。私たち親も、当たり前前の生活が大切なんだと教えられました。(千葉市保護者)



外で遊びたい！！

ぐんまYMCA リーダーOB 山田雄介

私は震災が発生した2011年に大学へ入学しました。そこでぐんまYMCAと出会い、震災復興支援の活動に多く参加をさせていただきました。今回はその参加した活動の中で思い出に残るエピソードを記述させていただきます。

私が大学1年生のときに初めて参加した震災復興支援活動は新潟県妙高市への雪遊びキャンプでした。郡山市で子ども達と合流しそのまま妙高市へ一緒に向かいました。私は小学校高学年男子のグループを担当しました。雪遊びなので日中は5mの積雪の中で雪を使って基地作りを中心に、そりで遊んだり、追いかけっこをしたりと思う存分遊びました。私が驚いたのはそのキャンプ初日の



夜でした。初日の夜はグループ毎の時間だったので、グループの子ども達と何して遊ぼうか話し合いをしていました。私は夜の時間であつたら室内でボール遊びやゲーム大会などをするものと考えていました。するとグループの子どもはみんな口を揃えて「外で遊びたい！！」と言いました。昼間に雪の中汗びっしょりになるまで雪遊びをしたにも関わらず、夜も外で遊びたいと言うとは思っていませんでした。私はこのキャンプの前に担当のYMCAスタッフから「子ども達は外で遊ぶことが難しい子がたくさん

いる」と言っていたことを思い出しました。私はこの瞬間、目の前の光景とその言葉が合致して、鳥肌が立って胸が熱くなったことを覚えています。私はよし！と思い、子ども達に最大限暖かい格好をさせて外遊びに出かけました。懐中電灯を片手に昼間に作っていた基地作りの続きを行ないました。子ども達は寒さなんか気にせず夢中になって雪遊びをしていました。私も懐中電灯を持って雪遊びをすることはとても新鮮な感覚で夢中になって雪遊びをしていました。雪遊びをしていて、ふと気づくと他のグループのお友だちも雪遊びをしていました。もちろん次の日も、そして最終日の朝もキャンプの子ども達はみんな雪遊びをしていました。子ども達は本当にとっても楽しそうに雪の上で遊んでいました。最終日、子ども達を郡山市に送り届けて子ども達の保護者にキャンプでの様子を報告すると、とっても喜んでくださいました。そのときに保護者の方々から震災後、外で遊ぶことがとても厳しい状況にあること、子ども達の心境の変化、家庭の生活の変化など様々なお話を伺いました。そのときに子ども達があそこまで外で遊ぶことに合点がいました。それまで私は、恥ずかしながら震災に関して無頓着で復興支援ボランティアも募金程度、情報収集も全くしていない状態でしたが、被災者の実際の声を聞いて自分には何をするができるかを考えるようになりました。当たり前以外で遊んでいられることが当たり前じゃない。そのことがずっと頭の中をめぐっていました。そしてそのときに出した答えが、復興支援活動への参加でした。私は大学生活、また大学を卒業してからもYMCAの復興支援活動にずっと関わってきました。その活動には日帰りの活動から子ども達だけの参加の活動、家族での参加の活動など多くの活動がありました。家族で参加するキャンプでは保護者の方々もいっしょになってたくさん汗をかきながら外で遊んでいました。毎回、キャンプが終わったあとに参加者の方々にアンケートを書いていただいてそこに楽しかった、また来たい、ありがとう、また会いましょうと書かれたものや子ども達を書いてくれる自分達の似顔絵を見るととても嬉しくなりました。

あるとき郡山市で行なわれた日帰りの支援プログラムで、キャンプに参加した子どもとその保護者の方とキャンプぶりに再会をしました。その子どもは遠目でも私を見つけるなり私の名前を呼んで思いっきり走り寄ってきました。最後に会ったときから1年以上経っていましたが、私の顔、名前を覚えていてくれ

ました。その日はその子とももちろん、参加した子ども達と思いつき遊びました。そして解散の時間となったときにその子の保護者から「こうして再会できるのはとてもいいですね。子どもは今日を楽しみに、リーダーに会えるのを楽しみに、遊ぶのを楽しみにしていました。また会えると思うと頑張れますよね。」とおっしゃっていました。私はこのときにこの活動は被災者の心の寄り所の1つとなっているのだと感じました。私はこのときからキャンプや活動で子ども達とお別れをするときに「さようなら」でなく「またね」という言葉を使うようにしました。また会っていっしょに遊びたい。また元気に会おう。それまでお互いがんばりましょう。との気持ちを込めてお別れをするようにしています。子ども達と年賀状を交換したり、保護者と連絡先を交換したりして活動が終わった後でも交流を持っています。

私は社会人になった今でも復興支援活動には参加をさせていただいています。まもなく震災から6年が経とうとしていますが、直近の復興支援活動のキャンプでも震災の残した爪痕を感じさせられました。そのときにその方の手助けになれたかどうかは分かりませんが笑顔にすることはできたと思います。私は震災が起こってからの今後のことが大事になってくるものと考えます。今後私にできることを常に追い求めてこれからの生活を過ごしていきたいと考えています。

子どもと一緒に未来を考える大切さ

埼玉 YMCA 総主事 小谷 全人

1980年頃の科学図鑑に「未来のエネルギー」として、原子力による発電機が載っており、その発電機が各家庭に1台ずつ設置されて、家族が団欒のひと時を過ごしている絵がありました。また、1970年代にテレビアニメで放映が始まった「ドラえもん」は、動力として原子炉が示されており（最近は別の表記に変更）、よくわからないながらも「すごい発明で便利な未来がやってくる!」というような感覚を持っていたことを思い出します。一方で、同時期に「はだしのゲン」を図書館で目に

して、怖さと便利さへの期待がまぜこぜにある状態で、原子力を意識した少年期を過ごしたことを思い返しています。

その後、年を重ねて年代が上がり、社会的な事柄を意識し始めた頃に、スリーマイル島やチェルノブイリの事故について学び、そこで改めて「原子力の怖さ」を実感し、初めて原子力を「自分に関わる事」として認識しました。しかし私の意識ではそこまでであり、その後 YMCA のリーダーやスタッフとして、平和や環境教育の学びの中で、エネルギーや温暖化等の問題において原子力発電等に触れることがあっても、意識は大きくは変わらず、2011 年に起きた東日本大震災によって、改めて「自身に関わる重大な事」として再認識するにいたりました。「自分に関わる重大な事」は、自分自身に直接的に関わる「自分の事」であり、関りの無い事を「自分の事」と認識することは、意識していないと難しいことですが、出会いと交わりによって、他者の事（＝自分に関係の無かった事）が「自分の事」となっていくとの思いがあります。



東日本大震災においては国内・海外の YMCA や各種団体・個人の思いのつながりによって支援活動がなされて現在にいたり、埼玉 YMCA でも仙台 YMCA の働きを通じて子どものメンタルケアのデイキャンプに関わり、被災した子どもやその家族に関わらせていただきながら様々なことを考えさ

せられてきました。現在、特に福島原発によって避難を余儀なくされている人たちが、様々な場所にいて避難生活を続けています。その中にあって新しい出会いの中、前を向いて歩んでいる人もいれば、苦しみの中で、痛ましい選択をしなければならない状況に追い込まれてしまう人がいることも覚えます。様々な状況があり、多様な支援や関りが必要とされていますが、その一人と出会い、喜びや痛みを分かち合いながら、苦労をともに背負って一緒に歩んでいく働きが YMCA に求められ、その働きは YMCA が成すべき業であると確信しています。

ケガの根本を直さなければいくら絆創膏を貼ってもその場しのぎにしかない、という事もありますが、しかし、現実として目の前で必要な手を差し伸べてい

る人、また、その手を差し伸べることすらできない人を知ったならば、私たち YMCA が成すべき事は、すでに示されていることではないでしょうか。

そして、それらのその取り組みの中で、次の時代を担っていく子ども達と、ともに考え学び合いながら一緒に育っていく大切さ。今までの経験や考えで答えを教えるのではなく、未来を信じて一緒に答えを創り出していくこと。その願いをもって具体的な行いをする YMCA の取り組みを、これからも続けていきます。

外国人被災者の現在と支援

福島移住女性支援ネットワーク (EIWAN) 代表
在日本韓国 YMCA 理事
佐藤信行

2011 年 3 月 11 日、東日本を襲った大地震と津波、福島第一原子力発電所の崩壊事故によって、住民は甚大な被害を受けた。死者 15,894 人、震災関連死者 3,472 人、行方不明者 2,562 人に上る（2016 年 3 月 10 日現在）。そのうち外国人の死者は 33 人（中国 12、韓国・朝鮮 13、フィリピン 4、アメリカ 2、カナダ 1、パキスタン 1）となる。

さらに福島第一原子力発電所の爆発によって、福島県に住む多くの人びとが強制避難／自主避難を余儀なくされた。5 年後の現在も、自宅に帰還できない県民は、県内避難者と県外避難者あわせて 84,289 人となる。このように遅々として進まない復興事業の中で、外国人被災者は生活再建の道をさらに阻まれている。

政府や地方自治体が行なっている被災者支援事業において、国籍による排除や制限はない。しかし、外国人被災者の多くは、「言葉の壁」「心の壁」によって、支援情報を得ること、それを利用することが、きわめて困難なのである。

福島県に住む外国人は 10,845 人。在日コリアンや外国人技能実習生、留学生を除くと、多くが移住女性である。移住女性は 1980 年代後半以降、日本人との国

際結婚で東北地方の農村・漁村・中小都市部へ移住して来た中国人・フィリピン人・韓国女性たちである。そのため、外国人住民のなかの男女比を見ると、福島県では「女性 100 人」に対して、「男性 58 人」となり、女性の割合が圧倒している。

移住女性たちは日本に来て 10 年、あるいは 20 年以上になる。しかし彼女たちの多くは、日本語での日常会話ができて、日本語を読むことと、書くことは、困難である。私たちが、地元の自治体・研究者・NPO と共同で実施した宮城県石巻市と気仙沼市での外国人被災者実態調査（2012～2013 年）では、日本語での会話は「まったく問題がない／あまり問題はない」と回答した移住女性は 51%になるが、日本語を読むことについては 36%、日本語を書くこと 24%と、下降していく。

被災地では、今でも余震が続いている。また、福島第一原子力発電所の爆発による放射能汚染に対する除染作業も終わっていない。福島県内の除染作業は、この 5 年間で住宅が 96%、道路は 60%が終了しただけである。

その中で移住女性は、放射能汚染に関する情報を強く求めている。私たちの調査によると、移住女性の 82%が放射能汚染に関する情報を強く求めている。さらに、子どもを持つ移住女性の場合、放射能汚染が子どもの健康に及ぼす影響を深刻に考えざるをえない。ところが、日本語が十分ではない移住女性が、放射能汚染をめぐる現在の状況を理解し判断することは、あまりにも困難である。

福島県国際交流協会が 2012 年、県内の外国人 100 人に対する調査によると、「原発事故」という言葉を震災前から知っていた外国人は 40%であり、震災後に知った外国人は 50%に上る。「放射線」という言葉についても、震災前から知っていた外国人は 43%、震災後に知った外国人は 42%となる。さらに、「原発事故」「放射線」を現在も知らない、と回答した外国人が、10%と 15%にもなる。これは、言葉の意味を知らないというより、事故の全容も、放射線被曝の現状も分からない、と回答したからであろう。

このように外国人は、放射能汚染について正確な情報を知りたくても、知ることが困難である中で、不安に駆りたてられる。福島県の外国人被災者、とくに移住女性が置かれている状況は、きわめて厳しい。

これまで東北地方には、移住女性とその子どもの人権問題に取り組むNGOや教会はわずかであった。それは震災後も同様であり、2013年に政府の予算で「被災地の外国語ホットライン」が設置されたばかりである。

このように社会的資源も人的資源も乏しい中で、福島移住女性支援ネットワークは福島県において2012年から、下記のプログラムを、試行錯誤を繰り返しながら進めている。

- (1) 人権としての日本語学習の支援
- (2) 労働・生活・DV・在留問題の相談と同行支援
- (3) 放射能被害に関する情報提供と相談
- (4) 「やさしい日本語」による防災ワークショップ
- (5) 移住女性の子どもに対する教育支援
- (6) 移住女性とその子どもの保養
- (7) 日本語学習の支援、生活問題の相談を行なうことができる地元市民のサポーター養成
- (8) ネットワークづくり
- (9) 情報発信

東京 YMCA の取り組み

元東京YMCAスタッフ 本田真也

東日本大震災緊急救援・復興支援については、石巻市に「YMCA石巻支援センター」を開設し、東京YMCAが緊急支援、復興支援を担っていた。地道に人と人との繋がりに沿って、子ども広場、学童支援、歌の広場等を展開して来た。福島への支援については、2011年4月ほどより期待が寄せられていた。それは、日本基督教団郡山教会の福島純雄牧師との出会いであった。実は福島

牧師は、仙台YMCAのスタッフ経験が1年あり、郡山市内でのYMCAの働きが始まることを願われた。郡山市は、福島第一原発より50kmに位置する。4月半壊の牧師館を訪ねたとき、駅前や近所には青年、子どもたちの姿はなかった。住む方々の緊張感を直に感じた。

その後、外遊びができない子どもたちの心身の健康と成長が心配される声が次々を上がっていた。YMCAとしては、体育館などの屋内プログラムができる場所探しを始めていた。いくつもある公立体育館は修理中や市民への開放が優先であった。郊外にある野外教育施設の体育館も周りの野山の高い放射線量数値が課題であった。

探し回る中、飛び込みで訪ねたのがカトリック系の郡山ザベリオ学園であった。土曜日は中学の部活動がフル活動であったが、趣旨に賛同を得て、年数回小体育館提供の申し出を受けた。いっきに準備が始まった。その後いつも高橋裕之教頭が出迎えて頂いたことに深謝する。

東京YMCA会員部主催として、プログラムをぐんまYMCAに協力依頼し、そして、石巻支援センターとの協働でもあった。2013年2月24日雪舞う中、40名ほどが参加し「YMCA屋内子どもプログラム」が始まった。リフレッシュキャンプ参加者がベースとなった。ぐんまYMCAスタッフ、ボランティアリーダーのもと、全体でのゲーム大会、随所でキャンプソングを歌い、後半は自由遊びで、ドッチボール、ガガ等存分に動き回った一日となった。また、保護者の方とは、コーナーを設け、お茶を飲みながらスタッフと話す場を、意を用いて設定した。除染されたものの不安があり外での運動を控えることが多い。子どもたちの生活の場近くで行われるこの屋内子どもプログラムの大切さを述べられた。その後継続して行われ、2014年12月には第6回が行われ、日本基督教団と共催し、(株)ヨークベニマル社が協賛した。第一部クリスマス礼拝後、いつものプログラム、そして、ヨークベニマルよりのお菓子のプレゼントを頂いた。参加者総勢110名となり、名称を「わいわいキッズ in 郡山」とした。2015年2月には福島県内初の「わいわいキッズ・スノーキャンプ」が、日清製粉グループの協賛を得てアルツ磐梯スキー場で行われた。

この郡山市での支援プログラムには、福島第一原発事故による放射能問題が横たわっている。一部帰還地域が拡大したものの収束したとは言えず、何十年

と向き合わなければならない事態である。YMCAとしては、子ども時代にのびのびと遊びきる体験が重要であること、また、子どもの命を守る視点よりプログラムを進めてきた。何度か行われた東日本大震災の追悼礼拝、報告会で福島プログラム参加保護者の語りに耳を傾けたい。

「多くの親は毎日が不安との闘いです。ここで暮らしていいのか、子どもに無用な被爆をさせてしまったのではないか」「夫婦でも親子でも考えが一致しないことも多いです。」「

その中で子どもたちは我慢する事をたくさん覚え、今も精一杯我慢しています。原発事故の情報の二転三転は、大人への信頼を大きく損なってしまいました。」と語る。リーダー達と楽しく会話する一方、語りだすと涙が溢れる姿が目に見えついている。さらに「放射能のことなど考えてはいけなような雰囲気」が漂ってきている」とも付け加えた。

かつて「原発安全神話」を大々的に展開してきた。それが崩壊すると次には「放射能についての安全、安心」キャンペーンが展開されてきていると思える。また、6年経った今、避難先での福島の子どもへのいじめが明らかになってきている。二重の苦しみを与える社会であろうか。再び、日常の縁を切り離すことではなく、大人社会を深く見通している子どもの眼差しに応える覚悟を持ちたい。今までは多くの協賛を得て、推進されたが、福島、郡山の地に足を着け、それこそ会員運動として、新たなプログラムの萌芽を求めたい。その時には、「自然」と「子どもたちの命」を傷つけた責任の重さ受け止めたい。そのような視点を基盤にしてこそ、働きが根付くのではないかと。

コンセントの向こうに福島が見えたか？ 福島を、私たちの問題に捉えられるか

横浜YMCA 総主事 田口 努



6年前の3月11日、横浜中央YMCAの本館と別館をつなぐエキスパンジョイントは、9階から1階まで、全てが落ちた。夕方には全ての交通機関が止まり首都圏は大パニックに陥った。帰宅困難者が続出し、横浜YMCA各拠点で、その日300人を超える方が宿泊した。保育園では、最後の引き渡し翌日の朝8時となった。被災地のために何かできることを考え始めた矢先の3日目、「計画停電」が発表され、深夜まで対応に追われた。4日目、ほとんどの私鉄が運休、JRも間引き運転となり首都圏は再びパニックに陥り、不安定な電力事情に対応する停電から、原発事故の深刻さをひしひしと感じ始めた。横浜YMCAでは、この計画停電の時期に原発に依存していた首都圏の電源の危うさを知り「コンセントの向こうに福島が見えなかった」ことを憂い、とにかく「電気を消して福島に元気をおくろう」という合言葉で節電に努めた。毎日変わる計画停電で8カ所のプールや体育館の運営に困難さを憶えて、春プログラムは全面中止となった。

震災2週間後から気仙沼、宮古にボランティアの派遣を開始した。福島を超えて被災地へのボランティアバスも出るようになった。横浜YMCAの東日本大震災の支援活動は、実は福島へ帰れぬ水産高校実習船の高校生を寄港地近くの三浦で受け入れたのが最初で、震災発生翌日から2週間ほど学生たちが避難した。その後、福島の障害者施設（約120名）の受け入れを福島県から打診され、横浜YMCAも協力し神奈川県を受け入れを決めていただくことや、その施設のグループホームの神奈川避難の支援も微力ながら展開した。夏に向けて三菱商事による保養キャンプが全国で開始された。横浜YMCAでは、秋冬、平日の保養キャンプを考え、保育園、幼稚園児のためのリフレッシュキャンプが始まった。資金は日本YMCA同盟国際賛助会のつながりからクレジットイスが支えてくださった。

首都圏のホットスポットが報じられ、福島に隣接する栃木、茨木はもちろん、神奈川も含めた首都圏での線量も通常値ではなく、首都圏も汚染されており福島だけのことではなかったのである。

横浜YMCAの保育園などからの募金や福島県の補助金を活用した保養キャンプは、6年たった今も続いている。今もつながる平幼稚園、郷ヶ丘幼稚園の園長先生から福島の子どもたちの今を寄稿していただいた。

いわき市では、子どもたちのためのキッズコーディネーション指導者養成や発達障がいや養護施設の子どもたち、中高生の保養や就労につながるキャンプ、他団体の保養キャンプ受け入れの研修協力を行っている。神奈川県内に避難する福島、東日本の子どもたちと家族の支援は、今回寄稿いただいている神奈川ユニセフ協会を事務局に多彩な団体と協働で進めており、横浜YMCAが共同代表を務め、現在も支援を続けている。毎年3月11日の前後には、「3.11をわすれない…つながる」取り組みを行っている。横浜DeNAベイスターズの協力を得て行う復興応援ナイターでは、避難家族約100名を招待し2万名を超える観客に、福島を忘れない、つながる思いをつないでいる。障がいのある人びとの状況を伝える「逃げ遅れた人々」の上映では出演者や監督から話を伺った。

「飯館村の母ちゃん 土とともに」も全国のYMCAで上映運動に取り組んでいる。そのお二人の監督にもご寄稿いただいた。

これらの日常化した活動から、どのように「ふくしまYMCAプロジェクト」につなげていくのか。この冊子作成を機に、皆さんとともに考えていきたい。あらためて、あの時、気付かされた「コンセンツの向こうに福島が見えるか」、福島の問題は私たちの問題であるという原点に返って考えていきたいと思う。原発や地球を汚し壊すエネルギーの電気を消して、自然の恵みを生かしたエネルギーで福島に元気をおくろう。最善を尽くして子どもたちの命を守るためにすべきことを、そして、被災者、避難者の孤立を防ぎ、希望が見つかり、つながりを深め、よりよく生きようとする力が増し、加えられるようにと願う。

福島の子どもたちの未来に向けて

郷ヶ丘幼稚園園長 前山成子



2011年3月11日におこった地震と事故は私たちの生活全部を一変させました。地震の恐怖はさることながら、日々降り積もる放射能被害から子どもの命を守る責任に追い立てられる毎日。一時間ごとに線量計に向き合い、汚染土にまみれた除染。食品の確保に奔走し、安全な外遊びの保障に躍起になっていたことを思い出します。

あれから6年が経過し、徐々に震災以前の生活が戻ってきました。園庭を森にしたいと長年かけて植樹に励んだ樹木は線量が落ちないため多くを伐採。だからか、とても見通しが良くなったり、安全で十分な砂遊び確保のために砂場を以前の3倍も大きくし、総入れ替えした砂で、子どもたちは思う存分に水や砂や土で遊びまわっています。

食品は、本当にたくさんの方々への援助で大助かりでした。でも毎日のことなので、なるべく遠方の海産物や野菜をクール便で送ってもらいました。約3年間にわたっての継続に苦労を重ねました。検査済みとあってもその数値の信頼度に納得いくまでには相当の時間を要しましたが、現在は近隣の新鮮な食物を使用できるまでになっています。

いわき市は海沿いに立地しています。背を向けて見上げれば美しい山々もあります。気候も温暖で雪も少なく台風も通過する地域です。スクールバスでよく海や山に出かける園外保育が日常茶飯事でした。でも現在は行っておりません。住宅街や町場のアスファルトが敷き詰められている場所や公共の公園は除染を済ませたため放射線量は通常に戻っていますが、森や山等の広域な場所は困難なため線量が不安定です。この地域に豊かな自然と戯れる子どもたちは、いつ戻ってこられるのかと、つい考えてしまう今日この頃です。

今年の春、あの時産まれた子どもたちが小学校へ入学します。希望と期待に胸を膨らませ、どの子もみんな元気に6歳の今を十分謳歌しています。この喜びがいつまでも続くことを願いながら、卒園の日には一人ひとりに証書を手渡したいと思っています。

(2011年度から福島県内の幼稚園、保育園の保養キャンプの受け入れを実施)

福島の人々と寄り添う歩みを

平幼稚園 園長 丹野真人



東日本大震災から、6年目を迎えました。震災直後から、横浜YMCAを通して、福島県の園児の保養プログラムを富士山YMCA グローバル・エコ・ヴィレッジで実施してくださってありがとうございました。震災直後は、原発事故による放射能の内部被曝から、子どもたちを一時避難させることが喫緊の課題でした。震災直後、職員はもとより、園児家族の多くもいわきから避難したために、卒園式も4月半ばにようやく開催。園児たちはマスクをつけながら、当日の風向きを気にしながら、10分、15分と時間を区切って外遊びをしていました。このような時期に、富士山キャンプの知らせが届いたことは、大きな励みでした。

震災から6年を迎え、復興支援の関心が薄れていく中で、今回「福島YMCA」という視点で、今後の福島に寄り添うプログラムを一緒に考えてくださることは、とても励まされることです。今も福島では、原発事故による放射能被害が重い課題として続いています。各地で避難指示解除の動きが進んでいますが、2015年9月に避難指示が解除された檜葉町も、ようやく町民の1割が帰還したにすぎません。故郷への帰還が困難な状況は、今後も原発周辺の各地で続くことでしょう。

いわき市は人口が34万人。そこに今も2万人の方々が、原発周辺地域から避難して生活しています。多くの人は、自分の住まいをいわき市に求めて定住するようになってきました。しかし、今も仮設住宅や借り上げ住宅で、故郷に帰る将来が見えない不安の中で暮らしている方々がいます。津波被害を受けた沿岸地域の堤防工事がおおかた終わり、新しい町を形成するために、かさ上げ工事が急ピッチで進められています。海岸沿いに3メートルも5メートルもかさ上げされた光景は、異様な光景です。そこに形作られる町並みはどのようなものになるのか、そこに住む人びとは穏やかな気持ちで海を眺めることができるのか、心配のたねは尽きません。

YMCAに期待することは何かと問われると、第一に思うことは、福島を忘れずに、福島の人々と寄り添う歩みを共に考えてほしいということです。

(2011 年度から福島県内の幼稚園、保育園の保養キャンプの受け入れを実施)

震災 6 年目の現実

映画監督 飯田基晴



2012 年にドキュメンタリー映画『逃げ遅れる人々 東日本大震災と障害者』を完成させた後も、ときおり福島県南相馬市を訪れ、取材した方々にお会いしてきました。

2016 年 7 月、南相馬市小高区の避難指示が解除されました。映画に登場してもらった、車椅子生活を送る菊池正子さんも 11 月によりやうく自宅に戻ることができました。5 カ月の避難所生活、5 年にわたる仮設住宅暮らしを経て、待望の帰宅です。ご自宅を訪ねると、まるで新築のように補修されており、家の中心に置かれた介護用ベッドの上で、菊池さんが朗らかな顔で迎えてくれました。仮設ではなかなか見られなかった笑顔を見て、こちらも嬉しくなりました。

しかし、東北の沿岸部では福祉サービスが非常に限られています。特に南相馬では原発事故の影響で、いまままだ人材が大幅に不足しています。小高区の人口は今年 1 月の時点でわずか 1,132 人、震災前のおよそ 1 割しか戻ってきていません。

菊池さんは高齢のお母さんとの二人暮らしです。受けられるサービスは最低限で、お母さんの頑張りで、かろうじていまの生活が成り立っています。お母さんが体調を崩したりすれば、菊池さんは施設に入所するしかないのではないかと、そんな懸念があります。

映画の取材先の一つ、南相馬の「さぼーとセンターぴあ」代表の青田由幸さんによると、実際に近年、親が倒れて施設入所を余儀なくされる障がい者が増えているそうです。

それが震災 6 年目の現実です。

こうした状況をなんとか打開していこうと、青田さんは現在、共生型のグループホーム建設に向けて動き出しています。

青田さんは震災以後、現地の障がい者やその家族の、厳しい状況と向き合ってきました。そうした中で青田さんが思い描くようになったのが、障がい者、高齢者、子どもを問わず地域の人びとの居場所となる、共生型のグループホームを作ることでした。苦しい中から絞り出されるように産まれた夢。僕はそこに希望を感じています。

この取り組みが実現するため、私たちになにができるのか。ともに考えてもらえたら幸いです。

(ドキュメンタリー映画『逃げ遅れる人々 東日本大震災と障害者』の上映会、講演会を実施)

避難者とともに

守りたい・子ども未来プロジェクト実行委員会副代表

神奈川県ユニセフ協会事務局長

谷杉 佐奈美



2011年3月11日に発生した東日本大震災は、世界的にみても先進国における自然災害としては未曾有の被害となり、一瞬にして多くの人びとから日常を奪い去りました。あらためまして、命を失われた皆さまへのご冥福と被災地の一日も早い復興を心からお祈り申し上げます。

さて、神奈川県ユニセフ協会では、震災の被害に遭った子どもたちへの支援活動として「福島子ども保養プロジェクト」「気仙沼復興応援プロジェクト」「守りたい・子ども未来プロジェクト」に取り組んでまいりました。とりわけ、神奈川県に避難している子どもたちを対象とした「守りたい・子ども未来プロジェクト」は、恒常的に避難者に寄り添う組織として2011年10月に実行委員会を立ち上げ、ゆるやかな支援ネットワークを構築しながら今日に至っています。相談窓口の開設/情報の発信/避難者同士の交流の場づくり/心のケアプログラムを主な活動として、震災から3年目の約340世帯をピークに、現在は

250 世帯ほどのご家庭とつながっています。プロジェクトの対象が子どもであることから、支援対象の約 9 割は福島からの避難者で自主避難のご家庭が多いのが特徴です。

震災から 6 年が経過し、被災地の復興に伴って帰還されるご家庭が増える中、自主避難者は今まで以上に複雑な状況におかれ、この春（2017 年 3 月末）で打ち切りとなった住宅の無償提供は、親御さんに大きな決断を迫ることになりました。やむを得ず元の自治体に戻るご家庭、考えた末他県に移住されるご家庭、あらたな住居を探して神奈川に定住するご家庭。転校先で子どもは上手くやっていけるだろうか、元のコミュニティは私たちを受け入れてくれるのだろうか…など、避難生活の終わりは喜ばしいことばかりではなく、新たな不安を抱えながらの再出発となっています。

今年度は、この再出発の不安を少しでも軽くできるような取り組み、そして必要とされる時には正面から受け止め、一緒に考え、解決方法を見出す存在として活動していきたいと考えています。

（神奈川県内への避難している子どもたちの保養プログラムやキャンプを実施）

「そこに YMCA があることの意味」

山梨 YMCA 総主事 露木淳司

山梨 YMCA では 2011 年の夏と 12 年の春と夏、原発事故の影響で外で遊べなくなった福島県の子どもたちをキャンプとスキーにお招きしました。特に家族や家を失った子どもたちを含む南相馬の子どもたちと過ごしたサマーキャンプは印象的でした。甲斐駒ヶ岳の麓、白州町での一週間、笑顔いっぱい思いっきり川あそびをしていた子どもたちでしたが、帰りのバスが故郷に近づくに連れ、キャンプソングを歌いながら号泣し始めたのです。バスを運転していた私は、ルームミラー越しに見えるその姿に戸惑い、感動の涙で目がかすみ、東北自動車道の予定されていたインターで降り損なってしまいました。次のインターから遠回りして到着したことも良い思い出になっています。出迎えてくれた

企画の責任者に「バスから泣きながら降りてくる子どもを見るなんて初めてです。」と声をかけられました。私たちと過ごしたその時間が子どもたちにとって有意義なものになったのかな、と胸をなで降ろせた瞬間でした。

震災を超えて、改めて地域に YMCA があるということの意味に気付かされました。東日本大震災の後、引き続き、茨城の水害や熊本地震など、大小様々な災害が日本列島を襲い続けています。私の記憶では阪神大震災や中越地震からですが、YMCA の歴史を紐解くと第二次大戦後の焼け野原からの復興や関東大震災まで遡ることができます。その時、その場所で、先人たちは必要とされる働きを祈りと共に有効に最大限に実行しました。そして、「そこに YMCA があってよかった」という一言を得ることができたのだと思います。山梨でもいつ巨大災害に見舞われるかわかりません。そして災害がなくても、「そこに YMCA があってよかった」と思っていただけの存在であり続けたいです。

災害は数を重ねるごとに悲惨な現実が増します。でも、その一つ一つが教訓となって、後世の人々の救いにつながっていきます。私たちの働きは小さいものかもしれませんが。でも、その小さい働きが共感を得るものであれば、きっとあとに続く者が現れ、それがムーブメントとなり、やがて大きなうねりとなって日本全体に、海を超えて世界にまで届くことでしょう。

ふくしま YMCA プロジェクトを応援します。復興に長い時間がかかる原発が引き起こした前例のないこの事態は決して福島だけの問題ではありません。日本中の YMCA に連なる人が福島に寄り添いたいと願っています。けれども、やはり「そこに YMCA があって欲しい」と心から願わざるをえません。ぜひ、近い将来、福島のその地に YMCA 会館を誕生させましょう。

第3章 統計編

※ ①スタッフ ②ボランティア ③参加者数

北海道 YMCA

2011 年

日付	活動内容	①	②	③
7-8 月	プログラムへ招待：札幌で避難生活を送る子どもたちを YMCA のプログラムに招待 (三菱商事スカラシップ+独自募金により実施)			21
12 月-1 月	プログラムに招待 (三菱商事スカラシップ+独自募金により実施)			58

2012 年

3/25-4/1	福島の子どもを YMCA 春スキーに招待 (三菱商事支援金により実施)			33
7-8 月	プログラムへ招待 (三菱商事スカラシップにより実施)			11
8/10-12	札幌在住避難児童を対象とした「道民の森フレンドシップキャンプ」(三菱商事支援金により実施)			12
8/17-23	福島在住児童保護キャンプ「福島フレンドシップキャンプ in 北海道」(三菱商事支援金により実施)			35
12/26-30	プログラムへ招待 (独自募金により実施)			18

2013 年

3/26-30	プログラムへ招待 (独自募金により実施)			18
7/25-8/21	プログラムへ招待 (独自募金により実施)			20
12/25-1/15	プログラムへ招待 (独自募金により実施)			25

2014 年

3/26-30	プログラムへ招待 (独自募金により実施)			23
7/25-8/12	プログラムへ招待 (独自募金により実施)			13
12/25-1/15	プログラムへ招待 (独自募金により実施)			18

2015 年

3/26-30	プログラムへ招待 (独自募金により実施)			14
7/25-8/12	プログラムへ招待 (独自募金により実施)			18
12/25-1/15	プログラムへ招待 (独自募金により実施)			23

2016 年

3/26-30	プログラムへ招待（独自募金により実施）			14
---------	---------------------	--	--	----

ぐんま YMCA

2011 年

8/23-26	三菱商事フレンドシップキャンプ	2	5	24
8/26-28	三菱商事フレンドシップキャンプ	2	7	33
9/17-19	三菱商事フレンドシップキャンプ	2	8	27
10/8-10	三菱商事フレンドシップキャンプ	2	15	62
11/25-27	三菱商事フレンドシップキャンプ	2	14	71
12/25-27	三菱商事フレンドシップキャンプ	2	9	37
12/28-30	三菱商事フレンドシップキャンプ	2	5	38

2012 年

1/7-9	三菱商事フレンドシップキャンプ	2	9	36
2/17-19	三菱商事フレンドシップキャンプ	2	6	36
3/16-18	三菱商事フレンドシップキャンプ	2	7	39
5/11-13	スマイルファミリーキャンプ	2	12	37
6/15-17	スマイルファミリーキャンプ	2	10	30
7/14-16	スマイルファミリーキャンプ	2	21	41
8/13-15	スマイルファミリーキャンプ	2	8	15
8/20-23	スマイルファミリーキャンプ	2	12	37
6/15-17	三菱商事フレンドシップキャンプ	2	7	41
7/23-25	三菱商事フレンドシップキャンプ	2	6	41
7/27-29	三菱商事フレンドシップキャンプ	2	8	41
8/31-9/2	シティグループ リフレッシュキャンプ	2	9	29
11/23-25	三菱商事フレンドシップキャンプ	2	10	38

2013 年

1/4-6	三菱商事フレンドシップキャンプ	2	10	39
1/12-14	三菱商事フレンドシップキャンプ	2	9	36
3/24-26	三菱商事フレンドシップキャンプ	2	8	44

7/13-15	三菱商事フレンドシップキャンプ	2	8	40
7/19-21	三菱商事フレンドシップキャンプ	2	6	40
8/30-9/1	シティグループ リフレッシュキャンプ	2	6	38
9/14-16	三菱商事フレンドシップキャンプ	2	4	36
11/2-4	三菱商事フレンドシップキャンプ	2	5	40
12/21-23	三菱商事フレンドシップキャンプ	2	4	37

2014 年

3/21-23	三菱商事フレンドシップキャンプ	2	7	48
7/19-21	三菱商事フレンドシップキャンプ	2	6	36
9/13-15	三菱商事フレンドシップキャンプ	2	6	37
10/11-13	三菱商事フレンドシップキャンプ	2	4	40

2015 年

2/27-3/1	三菱商事フレンドシップキャンプ	2	5	37
3/20-22	三菱商事フレンドシップキャンプ	2	4	34
8/7-9	森と星空のキャンプ (招待)	1		1
9/19-21	三菱商事フレンドシップキャンプ	2	7	33

2016 年

3/19-21	三菱商事フレンドシップキャンプ	2	8	40
3/12	ふくしまキッズスキークラブ	2	8	27
3/11	ふくしまキッズスキークラブ	2	10	36

東京 YMCA

2011 年

8/5-7	リフレッシュキャンプ (妙高高原ロッジ)			13
8/12-14	リフレッシュキャンプ (妙高高原ロッジ)			30
8/23-26	リフレッシュキャンプ (妙高高原ロッジ)			24
8/26-28	リフレッシュキャンプ (妙高高原ロッジ)			34
9/2-4	リフレッシュキャンプ (妙高高原ロッジ)			5
9/17-19	リフレッシュキャンプ (妙高高原ロッジ)			27

9/23-25	リフレッシュキャンプ (妙高高原ロッジ)			49
10/8-10	リフレッシュキャンプ (妙高高原ロッジ)			62
11/25-27	リフレッシュキャンプ (妙高高原ロッジ)			84
12/25-27	リフレッシュキャンプ (妙高高原ロッジ)			39
12/28-30	リフレッシュキャンプ (妙高高原ロッジ)			39

2012 年

1/4-7	リフレッシュキャンプ (妙高高原ロッジ)			48
1/7-9	リフレッシュキャンプ (山中湖センター)			48
1/7-9	リフレッシュキャンプ (妙高高原ロッジ)			39
1/13-15	こひつじキャンプ (山中湖センター) 日本キリスト教団との協働			30
2/17-19	リフレッシュキャンプ (妙高高原ロッジ)			38
3/9-11	こひつじキャンプ (山中湖センター) 日本キリスト教団との協働			30
3/16-18	リフレッシュキャンプ (妙高高原ロッジ)			39
3/23-25	リフレッシュキャンプ (山中湖センター)			44
3/27-30	リフレッシュキャンプ (山中湖センター)			39
4/28-30	リフレッシュキャンプ (山中湖センター)			51
4/28-30	リフレッシュキャンプ (妙高高原ロッジ)			47
4/28-30	こひつじキャンプ (山中湖センター) 日本キリスト教団との協働			31
5/3-5	リフレッシュキャンプ (妙高高原ロッジ)			44
6/15-17	リフレッシュキャンプ (妙高高原ロッジ)			41
7/14-16	リフレッシュキャンプ (妙高高原ロッジ)			38
7/23-25	リフレッシュキャンプ (山中湖センター)			41
7/27-29	リフレッシュキャンプ (妙高高原ロッジ)			41
7/28-8/4	こひつじキャンプ (阿南館センター) 日本キリスト教団との協働			9
8/10-12	リフレッシュキャンプ (戸隠)			39
8/17-19	リフレッシュキャンプ (妙高高原ロッジ)			34
8/24-26	リフレッシュキャンプ (妙高高原ロッジ)			22
8/31-9/2	リフレッシュキャンプ (山中湖センター)			29

10/6-8	こひつじキャンプ (妙高高原ロッジ) 日本キリスト教団との協働			35
11/23-25	リフレッシュキャンプ (山中湖センター)			43
11/23-25	こひつじキャンプ (妙高高原ロッジ) 日本キリスト教団との協働			41

2013 年

1/4-6	リフレッシュキャンプ (妙高高原ロッジ)			39
1/12-14	リフレッシュキャンプ (妙高高原ロッジ)			30
1/12-14	リフレッシュキャンプ (山中湖センター)			34
2/24	郡山屋内子どもプログラム (郡山ザベリオ学園)	5		60
3/24-26	リフレッシュキャンプ (山中湖センター)			44
6/7-9	こひつじキャンプ (山中湖センター) 日本キリスト教団との協働			35
6/29	郡山屋内子どもプログラム (郡山ザベリオ学園)	4		57
7/13-15	リフレッシュキャンプ (妙高高原ロッジ)			40
7/19-21	リフレッシュキャンプ (東山荘)			40
8/30-9/1	リフレッシュキャンプ (山中湖センター)			40
9/14-16	リフレッシュキャンプ (妙高高原ロッジ)			33
10/12-14	リフレッシュキャンプ (妙高高原ロッジ)			27
11/2-4	リフレッシュキャンプ (山中湖センター)			18
11/2-4	リフレッシュキャンプ (妙高高原ロッジ)			40
11/2-4	リフレッシュキャンプ (東山荘)			45
11/2-4	こひつじキャンプ (山中湖センター) 日本キリスト教団との協働			31
11/23	郡山屋内子どもプログラム (郡山ザベリオ学園)	6		41
12/21-23	リフレッシュキャンプ (妙高高原ロッジ)			37

2014 年

1/4-7	こひつじキャンプ (台湾) 日本キリスト教団との協働			22
1/11-13	リフレッシュキャンプ (山中湖センター)			41
3/21-23	リフレッシュキャンプ (山中湖センター)			48
4/3-6	こひつじキャンプ (台湾) 日本キリスト教団との協働			23
5/3-5	こひつじキャンプ (山中湖センター) 日本キリスト教団との協働			32
6/28	郡山屋内子どもプログラム (郡山ザベリオ学園)	3		46

7/19-21	リフレッシュキャンプ（妙高高原ロッジ）			36
7/19-21	こひつじキャンプ（山中湖センター）日本キリスト教団との協働			24
7/22-24	こひつじキャンプ（妙高高原ロッジ）日本キリスト教団との協働			27
8/15-17	リフレッシュキャンプ（妙高高原ロッジ）			40
9/5-7	リフレッシュキャンプ（山中湖センター）			36
9/13	郡山屋内子どもプログラム（郡山ザベリオ学園）		3	23
9/13-15	リフレッシュキャンプ（妙高高原ロッジ）			37
9/13-15	こひつじキャンプ（山中湖センター）日本キリスト教団との協働			22
10/11-13	リフレッシュキャンプ（妙高高原ロッジ）			43
11/1-3	リフレッシュキャンプ（山中湖センター）			38
11/1-3	こひつじキャンプ（山中湖センター）日本キリスト教団との協働			31
11/22-24	リフレッシュキャンプ（妙高高原ロッジ）			41
12-20	郡山屋内子どもプログラム（郡山ザベリオ学園）		7	97

2015 年

1/4-7	こひつじキャンプ（台湾）日本キリスト教団との協働			20
1/10-12	リフレッシュキャンプ（妙高高原ロッジ）			31
2/6-8	リフレッシュキャンプ（東山荘）			26
2/21-22	わい ぉつ いキッズスノーキャンプ（アルツ磐梯）		5	29
2/27-3/31	リフレッシュキャンプ（妙高高原ロッジ）			36
3/20-22	リフレッシュキャンプ（山中湖センター）			32
5/2-4	リフレッシュキャンプ（山中湖センター）			40
5/4-6	こひつじキャンプ（山中湖センター）日本キリスト教団との協働			16
5/29-31	リフレッシュキャンプ（妙高高原ロッジ）		3	34
7/11	郡山屋内子どもプログラム（郡山ザベリオ学園）			48
8/7-9	リフレッシュキャンプ（妙高高原ロッジ）			38
9/4-6	リフレッシュキャンプ（山中湖センター）			36
9/19-21	リフレッシュキャンプ（妙高高原ロッジ）			33
9/21-23	こひつじキャンプ（妙高高原ロッジ）日本キリスト教団との協働			29

10/2-4	リフレッシュキャンプ (妙高高原ロッジ)			36
10/10-12	こひつじキャンプ (妙高高原ロッジ) 日本キリスト教団との協働			26
11/21-23	リフレッシュキャンプ (山中湖センター)			39
11/21-23	こひつじキャンプ (妙高高原ロッジ) 日本キリスト教団との協働			34
12/19	郡山屋内子どもプログラム (郡山ザベリオ学園)	4	3	45

2016 年

1/9-11	リフレッシュキャンプ (妙高高原ロッジ)			36
3/19-21	リフレッシュキャンプ (山中湖センター)			40

横浜 YMCA

2011 年

3/18-22	いすき海星高校生・教員受け入れ (YMCA 三浦ふれあいの村)			13
8/7-13	福島県被災児童サマースクール受け入れ (YMCA 三浦ふれあいの村)			23
8/8-10	三菱商事キッズ・スカラーシップ 福島県福音協会小島保育園保養キャンプ (富士山YMCA グローンシル・エコ・ヴィレッジ)	8	3	25
8/13-14	三菱商事YMCA フレンドシップ・キャンプ 富士山ファミリーキャンプで避難して いる方々を受け入れ	2	6	7
8/14-15	同上	2	6	10
9/12-14	クレディスイス・YMCA 富士山キャンプ 平幼幼稚園受け入れ	8		40
9/26-30	クレディスイス・YMCA 富士山キャンプ たかつき保育園受け入れ	7	1	34
10/31-11/2	クレディスイス・YMCA 富士山キャンプ 郷ヶ丘幼稚園受け入れ	6	1	40
12/31-1/2	三菱商事YMCA フレンドシップ・キャンプ 富士山YMCA 年末年始ファミリーキャ ンプで避難している方々を受け入れ	2	5	50
10 月～	守りたい・子ども未来プロジェクト共同代表 (総主事 田口努)			

2012 年

1/2-4	三菱商事YMCA フレンドシップ・キャンプ 富士山YMCA 年始ファミリーキャンプ で避難している方々を受け入れ	2	7	32
1/18-20	クレディスイス・YMCA 富士山キャンプ 清風幼稚園受け入れ	5		20
1/21-22	三菱商事YMCA フレンドシップ・キャンプ 冬キャンプ富士山ファミリースキー キャンプで避難している方々を受け入れ	2	5	19

1/22	児童夢基金「福島！元気に遊ぼうプロジェクト」(株)カシマヤ製作所寄贈玩具 ボール8インチ45個 縄跳び(2重跳び用)45本、縄跳び(普通)40本 福島 県いわき市 郷ヶ丘幼稚園へ寄贈			
1/25-27	クレディスイス・YMCA 富士山キャンプ 郷ヶ丘幼稚園受け入れ	5		41
1/26-28	クレディスイス・YMCA 富士山キャンプ 小島保育園受け入れ	5	2	24
2/18-19	三菱商事YMCA フレンドシップ・キャンプ 冬キャンプ富士山ウィンターファミリースキー キャンプで避難している方々を受け入れ	2	6	41
3/25-4/1	福島の子どもの笑顔と元気プロジェクト2012ふくしまキッズ三浦半島春プログラ ム～三浦半島まるごと体験～主催：福島のこどもを守ろうプログラム実行委員会 実施：NPO法人オーシャンファミリー海浜自然センター (YMCA 三浦ふれあいの 村)		4	80
3/26-28	三菱商事YMCA フレンドシップ・キャンプ 春キャンプ富士山YMCA スプリングキャンプで 避難している方々を受け入れ	2	12	36
6/28-30	クレディスイス・YMCA 富士山キャンプ 郷ヶ丘幼稚園受け入れ	3		30
7/7-8	三菱商事 フレンドシップキャンプ	2	7	22
7/21-24	(財)国際障害者年記念ナイスハート基金福島の発達障がい児と家族のためのキャ ンプ (YMCA 三浦ふれあいの村)	3	26	44
7/22-24	クレディスイス・YMCA 富士山キャンプ 小島保育園受け入れ	7		45
8/7-9	三菱商事 フレンドシップキャンプ (富士山YMCA グローバル・エコ・ヴィレッジ)	2	6	10
9/5-7	クレディスイス・YMCA 富士山キャンプ たかづき保育園受け入れ	4		23
9/10-12	クレディスイス・YMCA 富士山キャンプ 平幼稚園受け入れ	3		32
9/12	平幼稚園、クレディスイス本社訪問	9		32
11/14-16	クレディスイス・YMCA 富士山キャンプ 大倉保育園受け入れ	3		30

2013 年

1/16-18	クレディスイス・YMCA 富士山キャンプ 清風幼稚園受け入れ	4		24
1/23-25	クレディスイス・YMCA 富士山キャンプ わかざき幼稚園受け入れ	3		31
3/16	講演会「放射線被害から子どもたちを守るために」菅谷昭松本市市長を迎えて (主催：保育事業)			180
7/20-21	ジョンソン株式会社協賛富士山YMCA キャンプ	2	11	36

8/5	こらっせ神奈川が行う被災者の保護プログラムに安全研修等で協力	1	12	
8/18	東日本大震災復興支援ゲームへ避難している方々を招待			113
11/18-20	富士山キャンプ 平幼幼稚園受け入れ	6		24
11/20-22	富士山キャンプ 大倉幼稚園受け入れ	6		34
12/10	いゆき市たかつき保育園へクリスマスカードとキャンドル20 個送付			
12/21-23	福島キッズへの支援スタッフ（野沢展）派遣	1		

2014 年

1/2-4	ジョンソン株式会社協賛富士山YMCA キャンプ	2	5	39
1/23-25	富士山キャンプ わかぎ幼稚園受け入れ	7		28
1/29-31	富士山キャンプ 小島保育園受け入れ	7		27
2/8-9	のたろんフェアに横須賀に避難している方々を招待5世帯 (横須賀市市民活動サポートセンター)			
3/8	毎オオした故郷：3.11 あの日、飯室村で何故死に続けたか＝酪農家長谷川健一氏を招 いての講演＝（横浜YMCA 対地雷をなくす会）			32
7/12-13	ジョンソン株式会社協賛富士山YMCA キャンプ	2	7	28
7/14-16	富士山キャンプ 郷ヶ丘幼稚園受け入れ	5		38
7/18	フェリス学院が行う被災者の保護プログラムに安全研修等で協力	2	25	
7/19-21	富士山YMCA コンフィデンスキャンプ（関東学院からボランティア 15 名）		5	39
7/21	東日本大震災復興支援ゲームへ避難している方々を招待			77
8/6	復興支援事業の一環として、福島県いわき市で作成されたカロムを使って大会を 行う。	14	16	130
9/15-17	富士山キャンプ 平幼幼稚園受け入れ	3		26
10/15-17	富士山キャンプ 小島保育園受け入れ	4		21
11/19-21	富士山キャンプ 大倉保育園受け入れ	5		26

2015 年

1/2-4	ジョンソン株式会社協賛富士山YMCA キャンプ	2	11	54
1/28-30	富士山キャンプ わかぎ幼稚園受け入れ	3		39
5/16	こらっせかながわが主催する被災地支援保護プログラムに研修協力	1		11

7/11-12	ジョンソン株式会社協賛富士山YMCA キャンプ	2	6	29
7/21	東日本震災復興支援ゲームへ避難している方々を招待			70
9/6	いわき市でのキッズコーディネーションの体験会への協力			50
9/14-16	富士山キャンプ 平幼稚園受け入れ	2		9
9/19-23	(CWS Japan、NPO 法人みみをすますプロジェクトとの協働) 福島県いわき市児童養護施設児童養育プロジェクトいわき育英舎横浜キャンプ実施	2	11	23
9/27	いわき市でのキッズコーディネーション現地指導者研修会への協力			17
10/22-24	富士山キャンプ 小島保育園受け入れ	4		23
11/11-13	富士山キャンプ 大倉保育園受け入れ	4		29

2016 年

1/27-29	富士山キャンプ わかぎ幼稚園受け入れ	5		48
1/2-4	ジョンソン株式会社協賛富士山YMCA キャンプ	2	6	47
3/4	シンポジウム 「いのちと原子力、私たちも未来への道」 @鎌倉YMCA			286
3/30	(CWS Japan、NPO 法人みみをすますプロジェクトとの協働) 2016 年 3 月 30 日～4 月 3 日 2015 年度（春）福島県いわき市児童養護施設児童養育プロジェクトいわき育英舎リフレッシュキャンプ	3	20	17

山梨 YMCA

2011 年

8/5-10	長野県茅野市にてサマーキャンプ	1	6	10
--------	-----------------	---	---	----

2012 年

3/24-4/1	白樺湖にてスキー及びびいちょ狩り等のディキャンプ	1	4	8
8/2-7	甲斐駒ヶ岳麓で川あそびキャンプ	1	4	21
8/20-26	富士山登山及び本栖湖畔にてカヌーキャンプ	1	5	11

広島 YMCA

2011 年

9/11	子ども達の未来を考えるシンポジウム	2	10	200
12/13-16	スタッフ2名を現地に派遣。(福島・会津若松・二本松・小郡・相馬・飯館・いわき等) 支援物資やクリスマスカード、トールペインティングなどを寄贈	2	1	

2012 年

1 月	二本松幼稚園に空気清浄器を寄贈			
3/11	広島で復興支援活動を行っている20を超える市民団体と「3.11 東日本大震災を忘れない追悼の集い 広島」実行委員会を立ち上げ、14時46分に“黙祷”を呼びかけ、平和公園の原爆ドーム前にて500個のキャンドルで3.11を作り、ランブシェード一つひとつにメッセージを描いていただき追悼集会を開催する。	5	40	500
7 月	広島 YMCA 保育園職員が福島・わたり福祉会 さくら保育園などの現地訪問	1		
10 月	わたり福祉会、さくら保育園へ どんぐり・松ぼっくり募金(リースの蔓、もみじの葉)などの送付			
11/9-10	ワイズメンズクラブ西中国部主催の「オータムハーブコンサート」(チャリティ)を3ヶ所で開催サポート	5		100
12/11	「広域避難者支援ミーティング in 中国」への参加	1		
12/25	いわき市 子育てポピークラブへ絵本・おもちゃを贈る			

2013 年

3/11	2回目となる「3.11 東日本大震災を忘れない追悼の集い 広島2013」を共同開催	3	30	400
10 月	わたり福祉会 さくら保育園へ どんぐり・まつぼっくり募金(リースの蔓、もみじの葉)などの送付			
12/25	いわき市 子育てポピークラブへ絵本・おもちゃを贈る。			

2014 年

3/11	3回目となる「3.11 東日本大震災を忘れない追悼の集い 広島2014」を共同開催	5	30	400
------	---	---	----	-----

9/12-16	国際コミュニティセンタースタッフが、双葉郡大熊～富岡町（福島県避難区域）およびいわき市仮設住宅、福島第一聖書バプテスト教会等を訪問、子育てポピークラブ・代表とも面会	1		
10月	わたり福祉会 さくら保育園へ どんぐり・まつぼっくり募金 (リースの蔓、もみじの葉)などの送付			
12/9-10	広島YMCA 保育園保育士が福島市内 さくら保育園・さくらみなみ保育園を訪問			

2015年

2/6	いわき市 子育てポピークラブへ乳児向け絵本を30冊贈る			
3/11	4回目となる「3.11 東日本大震災を忘れない 自由卓の集い 広島2015」を共同開催	5	30	400
3/12	「災害から復興を考えるフォーラム」への広島YMCAの会場提供。 (主催：ひろしま避難者の会「アスチカ」)	1		60
5月	映画「飯沼村の母ちゃんたち」(飯沼トータルサポート)制作および上映のための支援金送金			
6/20-21	国際コミュニティセンタースタッフがいわき市および福島第一聖書バプテスト教会等を訪問	1		
8/3-8	広島YMCA インターナショナルコースピースセミナーへいわき市からコース2名 (大熊町出身)を招聘 平和教育及び国際交流を実施	4	10	80
10月	わたり福祉会 さくら保育園へ どんぐり・まつぼっくり募金 (リースの蔓、もみじの葉)などの送付			
11/21-23	「世界核被害者フォーラム」実施サポート 事務局および記録、ユースボランティアリーダーの派遣実施	1	10	400
12/25	いわき市 子育てポピークラブへ幼児～小学生向け絵本を30冊贈る			

2016年

2/16	映画「飯沼村の母ちゃんたち」上映会を福山YMCAにて実施			
2/20	「核と人類-フクシマ後を考える」アーニーガンダーゼン、メアリーオールソン、スティーブリーバー講演会を事務局として実施	1	10	100

学生 YMCA

2012 年

9/8-11	子どもの遊び場支援（福島県南相馬市）および東京 YMCA 石巻支援センター（宮城県石巻市）でのボランティアワーク派遣	1	5	
11/17-18	子どもの遊び場支援（福島県南相馬市）でのボランティアワーク派遣（放射能測定所・アウシュビッツ平和博物館見学・福島県白河市）	2	7	

2013 年

1/19-20	子どもの遊び場支援（福島県南相馬市）でのボランティアワーク派遣（放射能測定所・アウシュビッツ平和博物館見学・福島県白河市）	2	5	
5/25-26	子どもの遊び場支援（福島県南相馬市）でのボランティアワーク派遣（放射能測定所・アウシュビッツ平和博物館見学・福島県白河市）	1	3	
9/7-8	子どもの遊び場支援（福島県南相馬市）でのボランティアワーク派遣（放射能測定所・アウシュビッツ平和博物館見学・福島県白河市）	1	3	
11/16-18	子どもの遊び場支援（福島県南相馬市）でのボランティアワーク派遣（放射能測定所・アウシュビッツ平和博物館見学・福島県白河市）	1	3	

2014 年

12/13-14	子どもの遊び場支援（福島県南相馬市）でのボランティアワーク派遣（放射能測定所・アウシュビッツ平和博物館見学・福島県白河市）	1	3	
----------	---	---	---	--

※ 2017 年3 月実施したアンケートの回答分のみ掲載。

